

水の文化

和船が運んだ文化





旅先で水を失ったとき

作家 椎名誠さん

ひとしずく



ずいぶん沢山の旅をした。途上国などはめったに橋などつくれないので川があると船を利用するしかない。二十分ぐらいで向こう岸に渡れてしまふところなどは渡し船ほど立派なものを使わず、両岸にワイヤーを渡し人々はハシケのようなものに乗ってエンジンが回転してワイヤーをひっぱって往復する、というのどかなものもあつた。そのときに乗船客の一人が自分の荷物から竹筒をとりだし一端に作つてある単純な呑みくちから水らしきものを飲んでいるのを

見て感心した。ぼくは常に水筒を持って旅していたが地元の人もそうやって常に自分の水を携帯しているのだ。あとで聞いて知つたが、そのハシケはときおりワイヤーから外れて川下に流されることがあるという。まあちよつとした漂流である。まだ携帯電話などなかつた時代なので途上国は、そういうゆるやかな流れでも救助の船がなかなかこないらしい。川の水は泥が多く飲料には適していなかつたので、ちゃんと身を守る準備はみなしているのだな、と感

心した。

外国のちよつとした島に日帰りで行つたとき、夕方の帰りの船が二便ある。ぼくは夕陽の写真を撮りたかつたのであとのほうにしたのだが、その二便目がなかなかこない。南の島は珊瑚礁の切れ目から入ってくるルートしかないのだが、暗くなつてしまふともう無理である。島の人は慣れているらしく二便に乗れなかつた人も案外平気で臨時の一泊準備をしている。

ぼくはポートモレスビーという母島の港にかえつて夕方には冷たいビールを飲むのを楽しみにしていたが、それは虚しい夢と消えた。おいてけぼりである。島にお店はない。

仲間の一人が水の入つたガロン缶を持ってかえつてしまつたのでぼくはおいてけぼりにされた焦りもあつて喉が乾いてる。乏しいコミュニケ





カンボジアにあるトンレサップという浅い湖。ここに25万人の水上市生活者がいる。沢山ある水を慣れない人が飲むとアメーバ赤痢になることが多いという 撮影：椎名誠さん

ーションで水を飲めるところを聞いたら、相手は理解し、天空を指さしている。最初は「雨をまて」と言っているのかと思ったが空は星だらけだ。気持ちはさらに焦った。まもなくその若者は少し傾斜のある椰子の木にスルスル登り、大きな椰子の実を三個ほど落としてくれた。

ブッシュナイフで飲みくちを作ってくれてすぐにそれにかぶりついたが、いやはやうまかった。珊瑚礁の隆起でできている南洋の島にはまず淡水の湧き水などない。

次に離れ島にいくときは予定より多めに水を携帯していくようになった。

オーストラリアの四十五度ぐらいになる先住民族のブッシュメンのところでは彼らは野生のスイカやメロンを水分にしていることを知った。ウッチテイクラブという葉巻ぐらいある蛾の幼虫は水分が多い。生きている水筒だ。

町を歩くと五十メートルおきに冷たい自動販売機の水を得られる日本のように、水に対してまったくストレスのない国に住んでいるとどっちが「異常」なのかわからなくなってくる。

椎名 誠 (しいな まこと)

1944年(昭和19)東京生まれ。流通業界誌編集長を経て、1979年(昭和54)から小説、エッセイ、ルポなどの作家活動へ。『さらば国分寺書店のオババ』でデビュー。『アド・バード』(日本SF大賞)などのSF作品、『わしらは怪しい探検隊』シリーズなどの紀行エッセイ、『岳物語』をはじめとする私小説など著書多数。

特集 和船が運んだ文化

人や荷を積んで水上を船で行く——これは世界中のさまざまな民族がもつ昔からの「知恵」である。日本も例外ではなく、一本の木を刳り抜いた丸木舟は縄文時代から、しかもかなり大きなものが使われていた。

江戸時代の経済・文化の隆盛を海運で支えたのは弁才船、いわゆる千石船だ※。これに代表されるように、幕末以降に洋式船舶が導入されるまで、移動や物流、漁業などに用いられた船を「和船」と呼ぶ。日本の主要な都市が大きな河口や海岸沿いに多いのは、海運や河川の舟運なしには成立しにくかったからだ。

船による交易で賑わい、独自の文化をもつに至った港町・湊町は枚挙にいとまがない。なかでも今回は、和船で人やものや技が伝わったことで生まれた、あるいは変容した文化に着目した。意外な結びつきのある複数の地域を巡ると、時空を超えて今日にも続く壮大な人の営みが見えてくる。

※弁才船と千石船について

江戸時代の海運の主力として全国的に活躍した代表的な廻船の船型が弁才船。そして1000石積前後の弁才船が普及するにつれ、積石数にかかわらず大型廻船と弁才船、両方の意味をもたせた「千石船」の呼称が一般化した。

目次

巻頭エッセイ

2 旅先で水を失ったとき 椎名誠
ひとしずく

特集

5 和船が運んだ文化 4つのストーリー
概論 構造と機能の盛衰史 安達裕之

9 和船が運んだ文化 4つのストーリー
Story 1

10 昆布ロードがもたらした明治維新と食文化
Story 2

16 陶器がつなぐ奥州と東海
Story 3

22 北前船が運んだ民謡——江差追分と小室節
Story 4

27 古式捕鯨にみる「人の行き来」と「技の伝播」

34 今見られる！乗れる！和船MAP 編集部

35 和船時代の心意気 編集部
文化をつくる

連載

36 丸木舟から帆船まで 古賀邦雄
水の文化書誌 45
食の風土記 6

38 伏流水と「もったいない精神」が生んだ六田麩
魅力づくりの教え 6

40 温泉観光地バージョンアップのしくみ 静岡県熱海市 中庭光彦
Go! Go! 109 水系 11

45 神話とたたら——出雲の民の暮らしを支えた斐伊川 坂本貴啓

50 センター活動報告

51 編集後記／ご案内

(敬称略)

和船はどのように発達したか

——構造と機能の盛衰史



縄文時代後期から晩期にかけての丸木舟（単材刳船）。材質はスギで、内側に焼いた跡がある（鳥取市桂見遺跡） 鳥取県埋蔵文化財センター蔵

そもそも和船とはどのようなものなのか。江戸時代の舟才船に代表されるように、日本において発達し、幕末以降に洋式船舶が導入されるまでのあいだ用いられた船が和船だ。「横風や逆風での帆走性能は、西欧を代表する多数の横帆おこはなを張った船よりも理論的に優れている」と故石井謙治（昭和時代の海事史学者）が書き残しているように、一本マストに一枚帆の舟才船は時代遅れではなく、18世紀後半には内航（国内の物資輸送）用の帆船として諸外国に比べても一流の域に達していたという。日本の造船史の第一人者である安達裕之さんに、和船の成り立ちと発達

の歴史について語っていただいた。

地域ごとに 多様な木造船

和船、すなわち日本の木造船についてお話しする前に、知っておいていただきたいことがあります。

基本的に木造船は、地域ごとに独自であったと考えてください。地域が違えば、船の構造も異なります。中国大陸と日本列島は違うし、朝鮮半島も違います。日本を見ても、日

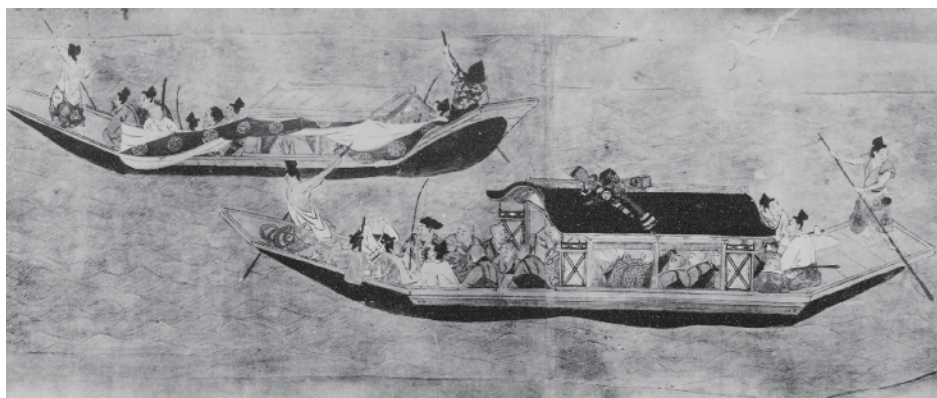
本海と瀬戸内・太平洋では違います。

日本の場合、地域によって使える材木が違うのが船の異なる原因です。瀬戸内・太平洋ではクスが船材として好まれました。しかし、クスは温暖な地域にしか生育しないため、日本海ではスギのような直材が船材の主役でした。このように植生という基本条件が違うため、材の特性を活かして船を造ると、必然的に違う構造の船になるわけです。

これから船の進化、つまり船の大型化の過程について、船の構造を中心に説明していきます。

丸木舟を漕いで 海も渡った縄文人

日本の船の起源は縄文時代の丸木船にあります。一本の木を削り抜いた船なので、造船史ではこれを単材



『法然上人行状絵図』第34巻 第2段「鳥羽より乗船淀川を下り給ふの図」。胴体と船首・船尾のつなぎ目に線があるため、三材構造の複材刳船とわかる（藤堂祐範 江藤激英 編 中外出版 1924） 国立国会図書館蔵

刳船くりぶねと呼んでいます。出土船は、全長5〜7m、幅50〜60cmで、かつおぶしのような形をしています。船材はおおまかにいって、太平洋側がカヤ、日本海側はスギでした。

縄文人は丸木船を沿岸や河川、湖沼での交通や漁獵に用いましたが、時には海を渡ることもありました。それは黒曜石の分布で確かめられます。島根県沖の隠岐島や伊豆諸島の神津島で産出される黒曜石は、中国



唐に渡った円仁が帰朝する際の光景を描いた『真如堂縁起』（遣唐使船 復路の場面）。ただし船型の特徴からすると、制作当時（1524年〔大永4〕）の遣明船をモデルにしたとみられる 真正極楽寺藏

地方や南関東・東海地方の縄文時代の遺跡から出土しています。

部材を組み合わせる 複材刳船と準構造船

1838年（天保9）に尾張国海東郡諸桑村（愛知県愛西市諸桑町）で川浚かわうすの最中に複材刳船がほぼ完全な姿で出土しました。複材刳船は複数の刳船部材を前後に継いだ船をいう造船史の用語で、出土船は船首・胴・船尾のクスの四材を継いでいました。幹は太くとも低いところで幅分れるクスは、大型船に必要な幅

では要求を満たしても、長さが不足するため、刳船部材の前後継ぎの技術が生まれました。胴の刳船部材は、半円筒の形状が屋根瓦を思わせるため、船瓦とか瓦と呼ばれ、後に板材にとって代わられても、瓦の称はそのまま残り、江戸時代には瓦のほか航などの字をあてています。

単材刳船を大型化したのが複材刳船ですが、積載量も限られ、耐航性にも欠けるため、川で使われました。中世の絵巻物、例えば『法然上人行状絵図』の淀川の川船を見ると、船底部には胴と船首尾の刳船部材の結合部を示す線が描かれており、三材構成とわかります。諸桑村の出土船のような四材構成の複材刳船は最大級の川船で、胴部材が二つあるところから「二瓦」と呼ばれました。海では複材刳船の両舷に舷側板を付けて深さを増し、積載量と耐航性を大きくした準構造船が活用されました。中世の絵巻物には海船として多くの準構造船が描かれています。

中世の船に関しては絵巻物から探るしかありません。実船の出土例がないからです。理由は、廃船の材の再利用が盛んだったからかもしれません。例えば刳船の廃材を用いた井戸枠などが出土しています。

材の違いが生んだ 棚板造りと面木造り

遅くも16世紀中頃までには、準構造船の船底の刳船部材を板材に置き換えた棚板造りの船が出現しました。棚板造りは、航と呼ぶ船底材に数枚の棚板を重ね継ぎし、多数の船梁で補強した構造をいいます。棚板構成は根棚・中棚・上棚の三階造りと中棚のない二階造りが基本です。棚板同士および棚板と航・船首材・船尾材との結合には通釘を使い、結合部には水止めとして横皮か檜皮を打ち込みます。いかに長大で幅が広くとも、航や棚板などは何枚もの板を縫釘と鋸で接ぎ合わせてつくり出します。ために船材の大きさに制約されず、大は2000石積から小は伝馬船まで、ほぼ同じ構造で建造できたのです。

古代・中世を通じて瀬戸内海とならぶ幹線航路であった日本海で単材刳船から構造船が出現する過程は不明です。単材刳船は別にして、大型船の出土例はなく、絵巻物にも描かれておらず、近世前期の海運史料に登場する面木造りの商船も18世紀前期に衰退し、満足な造船関係の資料を今に伝えていないからです。



安達 裕之 さん
あだち ひろゆき

日本海事史学会会長
東京大学名誉教授

1947年大阪府生まれ。東京大学工学部船舶工学科卒業。東京大学大学院総合文化研究科教授を経て現職。専攻は日本造船史。主な著書に『異様の船——洋式船導入と鎖国体制』（平凡社1995）、『日本の船和船編』（船の科学館1998）、『調べ学習 日本の歴史 日本の船の研究』（監修/ポプラ社2001）などがある。

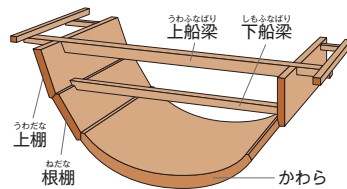


図1 準構造船
船底材に刳船を用いた「準構造船」
石井謙治著『図説和船史話』（至誠堂1983）を参考に編集部作成

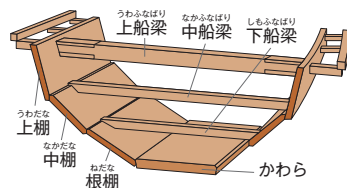


図2 棚板造りの構造船
船底材に刳船ではなく板材を用いた棚板造りの「構造船」
石井謙治著『図説和船史話』（至誠堂1983）を参考に編集部作成

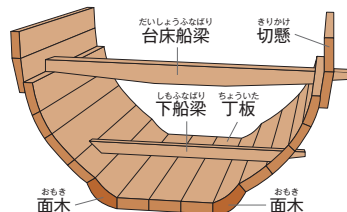


図3 面木造りの船体
準構造船を源としつつ、棚板造りとは異なる発展を遂げた日本海側の「面木造り」。スギやヒバなど長く育つ木を活かしたためと考えられる
石井謙治編『復元日本大観4—船』（世界文化社1988）を参考に編集部作成



弁才船(右)と菱垣廻船(左)。菱垣廻船はひし形に組んだ垣立の格子が特徴。1785年(天明5)
若宮八幡宮に奉納された「菱垣廻船絵馬」より 若宮八幡宮蔵/画像提供: 岡山県立博物館

ただ、面木造りの船体については断片的な資料をつなぎ合わせるとおおよその見当はつきまします。面木とは丸木から削り出したL字形に近い断

面形状の船材をいい、対向する面木の下端に船材を接ぎ合わせて船底部とし、上端に順次舷側材を接ぎ合わせ、最後に柵板を重ね継ぎした船体が面木造りです。面木造りが柵板造りとは別の系統の技術に属することは、連続的な外板構成と接ぎ合わせを基本とする材の継ぎ方を見れば一目瞭然です。船材だけに限っても、面木のような特殊な材を必要とするところに面木造りの特色があります。

複材刳船に起源を有する航が、海船では二材もしくは三材、大型の川船では四材を継いだのに対して、面木が一材であったことは、日本海の準構造船が単材刳船を船底部としていたことをうかがわせます。とするなら、柵板の枚数を増やし、柵板を外に開かせて船の大型化を図った瀬戸内・太平洋と違って、日本海では準構造船の船底部を分割して面木とし、間に船材を入れて幅を広げ、面木に舷側材を継ぎ足して深さを増すことによって、船の大型化をなし遂げたと考えてよさそうです。このように直材の性質を活かした面木造りは、柵板造りとは技術の系譜を異にするとはいえ、柵板造り同様、日本の豊富な森林資源を背景に成立した技術であることは同じです。

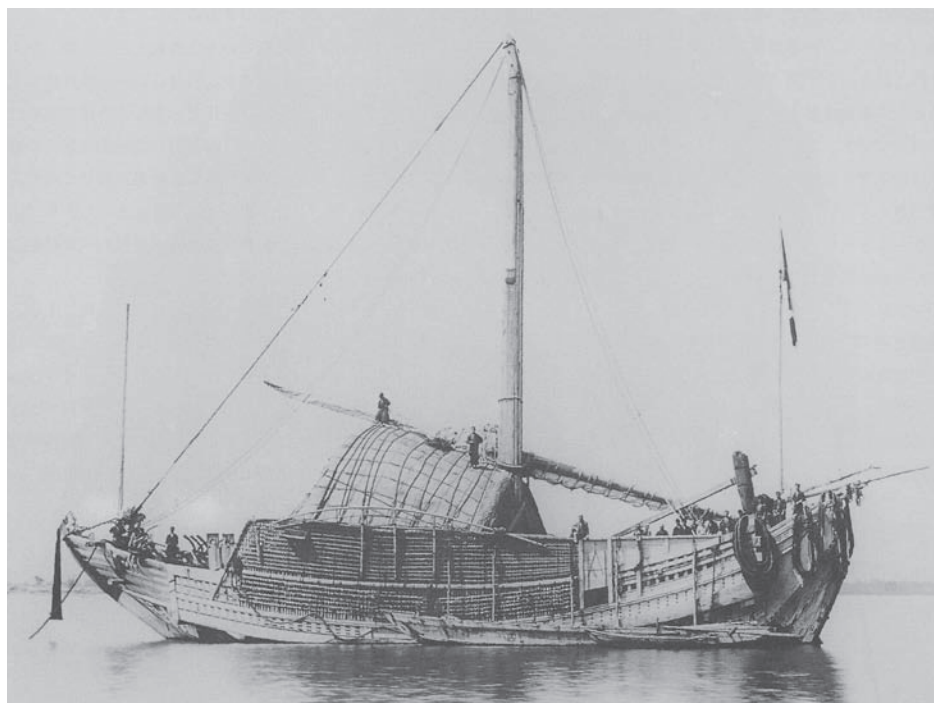
節税と積載効率を 両立した北前船の知恵

強力な統一政権下、江戸時代に国内海運は飛躍的な発展を遂げます。全国が水運網で覆われ、膨大な人口を抱える大坂・江戸を中心として商品流通が活発化しました。なかでも上方・江戸間は当代随一の幹線航路で、大坂から木綿や油などの日用品を積んだ菱垣廻船や灘・伊丹などの酒を積む樽廻船で賑わいました。

国内海運の主力廻船として活躍したのが弁才船で、多くの派生型・地方型を生み出しました。地方型の代表が北前船きたまへぶねです。海運史では北前船を江戸時代中期以降に蝦夷地と大坂を結んだ日本海の買積船かひづみせん、つまり船主が荷主を兼ね、自分の船に自分の荷物を積んで商売する船の意味で用いますが、ここでは北前船を弁才船の一地方型の意味に限定します。

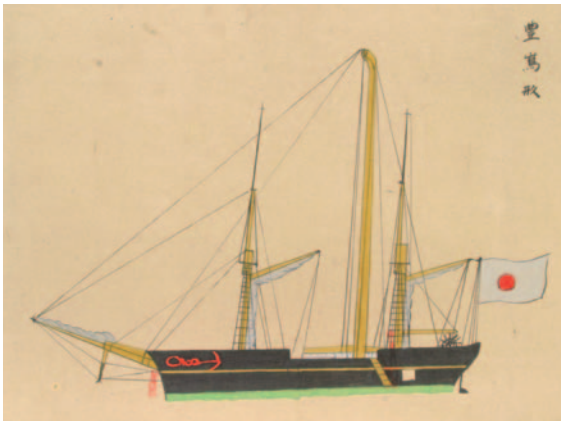
北前船の船としての特徴は、大きく反り上がった船首尾と大きく膨らませた胴の間で、一目で区別がつけました。北前船は実積石数が大工間尺を上回ることも有名です。

大工間尺は、航の長さこゝろあてと腰当の幅と深さを掛け合わせて一〇で除す積石数算出法です。普通、実積石数と



大工間尺は一致し、この時の満載喫水線は腰当船梁の下面でした。ところが、遅くも18世紀末以降、主要寸法を変えずに実積石数を増大させる方法が流行します。方法は二つ。胴の間の矧付はぎつけ(上柵に継ぎ足した舷側板)を高くして、船足を深く入れるか、胴の間を張らせるかです。いずれか一つをとるのが普通ですが、北前船は二つを同時にとったため、幕末以降、大工間尺の7割増しの実積石数

右近権左衛門(うこん・ごんざえもん)所有の「八幡丸(やはたまる)」(1357石積)。船首が大きく反った北前型弁才船で、矧付(はぎつけ)も高い。福井県南条郡河野(こうの)村(現 南越前町)の磯前(いそまえ)神社に奉納された写真
『日本の船—和船編』(船の科学館 1998)より転載/南越前町蔵



幕末につくられた和洋折衷の船「幕府の豊島（鳶）形（としまがた）」。「遊撃隊起終並南蝦夷戦争記（ゆうげきたいきしゅうならびにみなみえぞせんそうき）下」（玉置弥五左衛門）より 函館市中央図書館蔵



徳川秀忠が1631年（寛永8）に命じてつくらせ、3年後に完成した安宅船『安宅丸』。当時の大名たちが決してつくりだすことができなかった超大型で豪華な軍船。一度も戦うことなく、半世紀後に解体された。『御船（おふね）図』より Image: TNN Image Archives

が珍しくありません。洋の東西を問わず、節税と積載効率の要求を同時に満たす船は絶えず造られました。18世紀末以降の弁才船もその一例にほかなりません。

大船建造禁止令の変遷に見る江戸期の和船事情

江戸幕府は1609年（慶長14）に軍船・商船を問わず西国大名の500石以上の船を没収しました。これは水軍の主力艦の安宅船を没収して大名の水軍力を抑止することを主眼とした政策であり、以後、西国では500石以上の船は禁止されました。

1635年（寛永12）に幕府は武家諸法度を改訂して、大船建造禁止令を制定し、500石以上の船の禁止を全国化しました。大船建造禁止令は軍船・商船を問わず500石以上の在来船を禁止する法令ですが、西国以外には500石以上の商船が多数存在していたため、商人から苦情が出て、結局、3年後に商船を対象から外して軍船だけの禁止にします。なぜ幕府は日本人の海外渡航を禁止したときに造船制限をしなかったのかといいますと、話は簡単です。幕府は海外貿易を完全な統制下に置

いていたので、朱印船の渡航を停止するには年寄連署奉書を長崎に下すだけで十分で、1609年のような措置は必要なかったのです。

五代將軍綱吉以降、軍船無用の泰平の時代が続き、大船建造禁止令は死文と化します。この禁令には立法趣旨が条文に明記されていないうえ、禁止の対象が「大船」であったため、本来の立法趣旨がいまいにならば、国内の政治状況や国際環境、それに時代の推移による大船の意味の変化に応じて、その時に問題となる大船を読み込み、新たに立法趣旨を定められます。大船は、相対的に大きな船を指すほか、当代の代表的な大型船の代名詞としても用いられ、幕末には西欧の航洋船が和船に比して巨大であったことから、西欧船もしくは航洋船なかならず洋式船を意味しました。ために大船建造禁止令は、鎖国祖法観の浸透とともに海外渡航可能な船を禁じる鎖国維持の法として復活を遂げます。

漁船にまで及んだ技術の和洋折衷化

幕末に洋式帆船技術が導入される

船は遠距離の大廻しと近距離の小廻しに分かれ、小廻しにはおおむね200石積以下の小船を用いるのが通例ですが、折衷化の度合いに差がありました。大廻しでは船首尾に洋式の補助帆を追加する程度のわずかな洋式技術の摂取で済ませる北前船のような船が珍しくなく、一方、小廻しでは帆柱を二本にしてスクーター式の縦帆を揚げたり、舵を洋式化するなど洋式技術の摂取は顕著でした。1923年（大正12）出版の小型船の積量測度の入門書のなかで東京通信局海事部の編者はこう述べています。現今、昔ながらの帆装は日本海の北前船や越中船に多く、瀬戸内・太平洋ではなほだまれである、と。折衷化の波は漁船にまで押し寄せ、折衷型漁船が出現しました。この船の船体構造は西洋型で、船体形状は和船型です。在来漁船の二階造りにならった船体形状を和船型の船体形状といい、船体に角があります。今日では船体に角のある船は珍しくありませんが、往時の木造船では和船を除けばまれでした。今日では純粋な意味での和船は姿を消しましたが、角のある船体の船に面影をとどめています。

（2016年8月9日取材）

和船が運んだ文化

4つのストーリー

和船が運んだ数多あまたの文化。そのなかでも、遠距離でありながら伝播した地に少なからず影響を与えたテーマを取り上げ、双方の地を編集部が巡った。あまり知られていないそれぞれのストーリーとは？

昆布ロード

Story 1

富山藩と薩摩藩による「知られざる交易」

陶器

Story 2

武家社会の到来が結んだ、東北と東海の「縁」

民謡

Story 3

信州から北海道・江差へ伝わった「無形文化」

古式捕鯨

Story 4

紀州・瀬戸内・西海が昇華させた「捕鯨文化」

江差町「鷗島」の
北前船係船跡





昆布のとれない富山県だが、今でもおにぎりには海苔ではなくとろろ昆布を巻く
撮影協力：株式会社四十物（あいもの）昆布

昆布ロードがもたらした 明治維新と食文化



だしや煮しめの具材など、日本人の食生活になくしてはならない昆布。産地は羅臼、利尻などに代表される北海道が有名だが、消費量では富山県が際立って多く、数年前までは不動の全国1位だった。昆布の採れない富山県で、なぜ食されているのか。それは江戸時代、富山県域が昆布をはじめとする海産物を運んだ海上流通の中継地を多く擁していたことに端を発する。同じく昆布が息しない沖縄（琉球）でも食されているのは、富山藩の商人たちが薩摩藩に昆布を持ち込んでいたからだ。この富山藩と薩摩藩による「知られざる交易」が、やがて倒幕へとつながる。その痕跡を富山県と鹿児島県でたどった。

1863年（文久3）の薩英戦争で使われた「十文字砲」。砲身には島津家の家紋「丸十紋」が刻まれている 撮影協力：尚古集成館

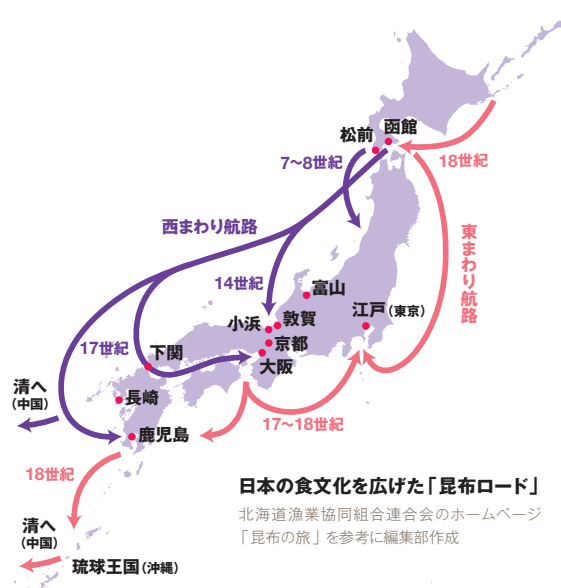


富山藩と薩摩藩—— 外様同士の暗中飛躍

「昆布ロード」をご存じだろうか。

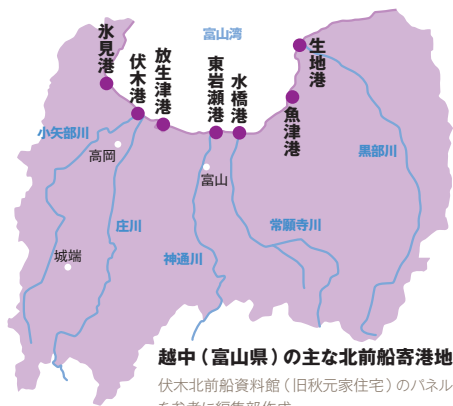
北前航路が拓かれた江戸時代中期から幕末、明治にかけて、蝦夷地（北海道）で収穫された昆布は北前船で京都・大坂へ運ばれるだけでなく、薩摩から琉球を経て、さらには中国（清）まで届けられていた。その道筋を「昆布ロード」と呼ぶ。

当時、昆布は重要な品だった。甲状腺障害が流行していた清では予防のためヨードを多く含む昆布が求められていたが、海水温が高い清では良質な昆布は育たない。そこで財政の悪化した薩摩藩は、東アジアの海洋貿易の中継地として栄えていた琉



日本の食文化を広げた「昆布ロード」

北海道漁業協同組合連合会のホームページ「昆布の旅」を参考に編集部作成



越中（富山県）の主な北前船寄港地

伏木北前船資料館（旧秋元家住宅）のパネルを参考に編集部作成

球王国を介し、清に対して「抜け荷」（注1）と呼ばれる密貿易を始める。清への貢ぎ物の一つが松前産の良質な昆布だった。

ところが北海道からは遠い薩摩藩で、昆布の入手は容易ではない。そこで薩摩藩が目つけたのが富山藩。

富山藩

全国に販路を広げた 越中富山の薬売り

当時の越中国（注2）には、富山藩領の岩瀬、本家・加賀藩領の放生津や伏木といった港が北前船の寄港地として賑わっていた。北海道の松前から昆布やニシンを積んだ北前船が寄港して荷を下ろし、越中国からは米やワラ製品などが積み込ま

ともに外様大名であり財政の逼迫した富山藩と薩摩藩が密かに手を結び互いに利益を得る。薩摩藩は密貿易で得た利潤で財政を立て直し、倒幕へと向かったともいわれる。

北前船を舞台とした両藩の企てとは、どのようなものだったのか。

薩摩藩とのつながりで忘れてはならないものに、「越中富山の薬売り」（注3）で知られる富山藩の売薬がある。元禄年間（1688〜1704）から現在まで300年以上続く伝統的産業だ。売薬が生まれた背景に、富山の厳しい自然環境があった。

富山藩は、加賀藩の一部として120万石を誇る大名・前田家の領内より、支藩として1639年（寛永16）に成立。石高は10万石だが、大半の領地や港などの交通の要衝は加賀藩が押さえ、富山藩に残されたのは神通川に沿う縦長の、稲作には不利な領地だった。

「神通川は水勢の強い川でした。加えて東にある常願寺川にも領地が挟まれているので、たびたび洪水に見舞われて、米づくりは難しい土地で



「日本のベニス」とも呼ばれる内川の風景。かつて富山県射水市（旧新湊市）の海岸部にあった放生津湊の、運河のような役割を果たした



越中の寄港地・東岩瀬港での交易で財をなした北前船廻船問屋「森家」の外観。東岩瀬における海商の町家の形を残す。国指定重要文化財

（注2）越中国

現在の富山県域を占めた旧国名。律令制下で北陸道に属す。富山藩は越中国の中央部（おおむね神通川流域）を領有。

（注1）抜け荷

江戸時代に幕府の禁令を破って行なわれたいわゆる密貿易のこと。当時外国との取引は公には長崎の会所を通して行なわれ、厳重に統制されていた。



富山藩の売薬の名を広めた「反魂丹」の薬袋。これは最近寄付された江戸時代のもの 富山市売薬資料館蔵



得意先に薬を配置するとき用いる「預箱（あずけばこ）。時代とともに素材や形状が変わっていったことがわかる。上は富山市売薬資料館の学芸員、兼子心さん

薩摩藩

財政再建を目指す 薩摩藩の目論見

同じころ、島津家を藩主とする薩摩藩もまた財政難にあえいでいた。火山灰地である薩摩はもともと農業による生産力が低かった。そのうえ参勤交代で財を消耗し、加えて江

戸城の改修、木曾川治水工事などを幕府から命ぜられ、莫大な出費を強いられた。財政は常に火の車。八代藩主・島津重豪のころには500万両（当時の藩の収入の30〜40年分に相当）にも達する借金を抱えていたという。1609年（慶長14）に琉球王国（以下、琉球）を征服し幕府にその支

配権を認められていた薩摩藩は、奄美諸島の生産物「黒糖」を大坂に運び専売品として利益を得ていた。また、琉球経由で清から入手した唐物（中国製品）を新潟・海老江湊経由で江戸や東北、北陸へ流通して収入源としていた。さらに、薩摩藩はより大量の昆布を確保し、琉球を経由し

した」と、富山市売薬資料館の兼子心さんは話す。これらの暴れ川は歴史に残る大水害をしばしば引き起こしてきた。富山藩は長年にわたる財政難に陥り、領民は農閑期に外に出て商売をする必要に迫られた。そのため登場したのが売薬だったという。しかし水が豊富なことは、薬をつくるには好条件だった。兼子さんは「豊富な雪解け水や衛生的な水は薬づくりには欠かせない」と言う。「寒の水」といって、大寒のころにとれる水を薬に使いました。薬種や道具を洗うのに水は必要ですし、薬種を粉砕するにも水車の動力を利用しました」

製薬に適した富山の気候と地形。その代表作が「反魂丹」という薬だ。富山藩二代藩主・前田正甫が江戸詰りの際、江戸城で腹痛を起こしたあ



射水市新湊博物館にある北前船の模型。射水市柴家所蔵の長船丸（船がふねまる）600石積型をモデルにした。実物のほぼ7分の1の縮尺。左は伏木観光推進センターの上 忠さん



〔注3〕富山の薬売り

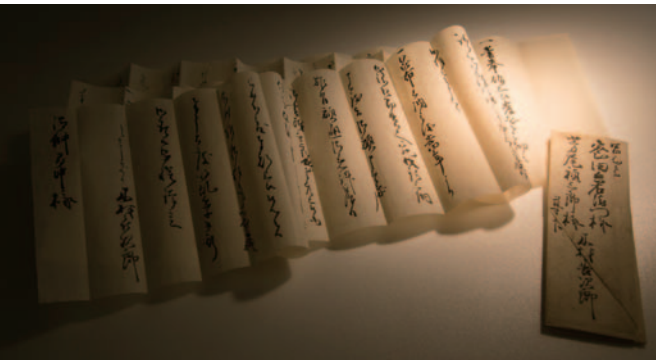
富山藩の家庭薬行商人。また、その行商のこと。江戸初期に始まるといわれ、藩の保護・統制を受けて発展。全国各地の得意先に薬を置き、年に1〜2回訪問して使用分の代価を清算し、薬を補充した。

〔注4〕町年寄

江戸時代の町役人の呼称の一つ。町役人の筆頭にあり、町内の日常行政を取り扱う有力者。身分としては町民となる。

〔注5〕八尾

富山県富山市の南部を占める地域。



薩摩藩との仲介役を務めた町年寄・木村喜兵衛から薩摩組に宛てた書状の一部。富山を代表する売薬商家・密田家が保管していた。献上品だけでなく金品も要求されたという

て清に献上する策を打つ。

そこで目をつけたのが富山の売薬人たちである。売薬人は全国を22ブロックに分け、行商先の地方に仲間組なまをつくり販売を行なっていた。そのなかに薩摩藩内で売薬を行なう商人団「薩摩組」があった。

薩摩藩はこの薩摩組に対して領内での売薬を認める代わりに、松前の良質な昆布の提供を求めたのだ。当時の薩摩藩は経済上の問題から他藩の商人の出入りを禁じていたが、薩摩組の出入りのみ例外的に認めた。

売薬人たちにとっても薩摩と手を組むことはメリットだった。

売薬が和漢薬生成の材料に用いる薬種は、清からの輸入品に依存して

いた。江戸時代に日本に入ってくる薬種は長崎の出島からいったん大坂の道修町どうしゅうまちに集まり、薬種問屋を通じて全国に流通していた。しかし高価なため、売薬人もまた薬種を安く仕入れる方法を模索していたのだ。

密貿易は幕府公認だった!?

1847年(弘化4)、薩摩組は仲介人である鹿児島町年寄(注4)の木村喜兵衛から総額500両の資金援助を受けて昆布の運搬を開始する。昆布を買い取ったのが薩摩藩であることが幕府にばれぬよう、薩摩藩は町年寄である木村を仲介役とし昆布を購入させていたようだ。

蝦夷で仕入れた昆布は、富山を代表する売薬商家・密田家みつだが所有する2隻の船で、薩摩藩の山川港まで運ばれた時期もあったそうだ。

当時の薩摩藩は、富山の売薬人にとって逆境の地だった。幕府が鎖国政策をとるなかで、薩摩藩も他藩の出入りを厳しく監視する「二重鎖国」の状態だったことに加え、薩摩藩は浄土真宗を禁教としていた。富山藩は浄土真宗が盛んなため、売薬人たちは薩摩藩領で「富山の売薬」と名乗れず、「越中八尾やちの(注5)」の売

薬」と名乗っていたそうだ。

「薩摩藩領で浄土真宗と知られると薬は没収され営業停止になりますから、売薬人たちは(八尾)」という富山南部の地名を使い、そこから来たと偽って商売をしていました。越中とは名乗れても、富山とは名乗れなかったのです」と、鹿児島市西郷南洲顕彰館の館長、徳永喜さんは話

す。その後、薩摩組の商人たちはたびたび営業差止を受けたが、そのたびに木村喜兵衛が差止解除を藩に交渉し、また時には差止を未然に防ぐために薩摩藩に喜ばれる献上品の提案も行なった。松前産の昆布も、もとは薩摩組が薩摩藩領で営業を認めてもらうために、木村が指示した献上品の一つだった。

また「密貿易」と言われることに関して徳永さんはこう指摘する。

「1639年(寛永16)に幕府が鎖国令を出します。この時に幕府が認めた貿易港は唯一長崎の出島であるという記述が歴史教科書にあります。誤りです。実際には琉球口りゅうきう、対馬口、松前口、そして幕府が公に認める長崎口。外交史では(四つの口)」と言いますが、この四つの港は幕府が許可した貿易港でした」



薩摩藩の琉球口貿易の舞台だった山川港。鹿児島県の薩摩半島先端付近にあり、波の穏やかな天然の良港。島津氏は1583年(天正11)にここを拠点港として確保している

『堆錦螺鈿立』より「進貢船(しんこうせん)寄港の図」。進貢船とは琉球から進貢(貢ぎ物を献上すること)のために中国に渡った船のこと。右ページの北前船とは異なる構造であることがわかる 鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵

長崎以外の三つの港は、長崎でト
ラブルがあった際に輸入が途絶える
事態を防ぐため、補助貿易港として
開港していたのだ。

幕府にとっては安全弁の一つに過
ぎなかつた琉球口を、借金が膨れ上
がる薩摩藩は返済の切り札にしよう
と考えた。幕府から数回にわたる貿

薩摩藩と富山藩、 それぞれが得たもの

清との貿易で莫大な利益を得た薩
摩藩は、財政を立て直しに成功する。

その立役者が八代藩主・重豪に才覚
を認められ、500万両の財政整理
の責任者に任用された調所広郷だ。
清との密貿易を藩政改革（注6）の一
つに掲げ、財政立て直しに奔走した。

調所の努力により藩の収入は増え、
借金500万両を返済したただけでな
く、50万両の貯蓄も達成した。身分
が低く茶坊主上がりだった調所は功
績が認められ、57歳で家老格に昇進
する。

「外洋に近い薩摩は常に周囲を警戒
し情報戦には長けていたが、なかで
も調所は市場読みに優れた、当時と
してははずば抜けた経済人」と徳永さ

易量制限を命じられるも、薩摩藩は
琉球口貿易の拡大を続ける。徳永さ
んは言う。

「世にいう密貿易とは薩摩藩による
不正規ルートでの貿易活動を指すの
ではなく、薩摩藩が幕府から許され
た範囲を逸脱した貿易活動と考える
べきでしょう」

んは評する。ところが1848年
（嘉永元）、調所は江戸で服毒死する。
幕府に密貿易が知れることを怖れて
の自殺ともいわれているが、詳細は
わかっていない。

薩摩藩は1851年（嘉永4）に11
代藩主となった島津斉彬のもと、洋
式の機械工場群を数カ所建設する。
ガラス、鉄、綿布などのほかに火薬、
砲弾、大砲などの武器も製造した

「集成館事業」だ。西洋事情に詳し
かった斉彬が列強の武力を危惧して
進めた事業で、集成館で製造した大
砲が後にイギリスの軍艦に大打撃を
与え、倒幕の武器にも用いられた。
密貿易で得た利益が結果的に倒幕資
金の一助となり、明治維新を迎える
こととなる。

尚古集成館で学芸員を務める山内
勇輝さんは、「江戸や大坂から見れば



調所広郷の肖像画。調所は財
政改革を成功させ、のちに家老
格となるが、謎の死を遂げる
尚古集成館保管

薩摩藩は辺境の地ですが、裏を返せ
ば外国に近い。日本の南端にありな
がら最先端の工場群をつくること
できたのは、外国の知識や技術が手
に入りやすかつたためです」と話す。

一方で、富山の売薬人たちにも利
益はあつた。松前から運んだ昆布の
見返りとして中国産の良質で安い薬
種を買うことができ、また関係する
廻船問屋なども大いに潤った。

現存する資料が少なく、富山藩が
売薬事業でどれほどの利益を上げた
かは定かではない。しかし、富山藩
領のみならず越中国全体に売薬に携
わる人々が多かつた事実をみれば、
富山藩が売薬により相当の利益を得
ていたことは想像に難くない。

売薬が400年近く続いてきた理
由について、射水市新湊博物館の松
山充宏主任学芸員は言う。



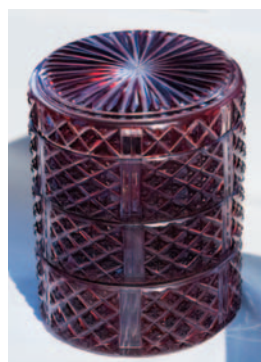
射水市新湊博物館の松山
充宏主任学芸員

「富山藩が売薬をする際の方針とし
て、まずは各家に薬を配置し、使っ
ただけのお金を頂く（先用後利）の
方法をとっていました。先に用いて
後に利する。ある意味相手を思いや
る福祉事業的な側面がありました。
この販売精神が売薬を長い間支え
てきたのではないのでしょうか」

「昆布ロード」が もたらした食文化

1880年代（明治期）に入り蒸気
船が進出し、鉄道や道路が整備され
ると北前船はかつての勢いを失った。
密貿易も終わりを迎える。しかし、

「昆布ロード」の中継地では、各地
の食文化と昆布が結びつき独自の昆



透明ガラスに色ガラスを厚く被せ、色ガラスにカット
文様を施した「薩摩切子」。1851年（嘉永4）、薩
摩藩主となった島津斉彬が西欧列強に対抗して近代
化を推し進める「集成館事業」の一つとして始めた

（注6）藩政改革

調所が行なったことは、ほかに奄
美大島の黒糖の独占専売制度の
強化、偽金づくりなども挙げられる。

参考文献

『海洋国家薩摩』（南方新社）、『海の掛け橋 昆布ロードと越中』（北日本新聞社）、『昆布と日本人』（日本経済新聞出版社）、『富山の薬一反魂丹』（富山市売薬資料館）、『近世日本海海運史の研究—北前船と抜荷』（東京堂出版）、『図録 薩摩のモノづくり—島津斉彬の集成館事業』（尚古集成館）

布食が生まれた。

北海道では主にダシとして昆布を利用するが、北陸では薄く削りとる昆布に、大阪では佃煮にする。関東は「昆布ロード」の到達が遅かったため、消費量がさほど伸びなかったのではないかとわれている。

沖縄では昆布を豚肉や野菜と炒めて食べる「クープイリチー（昆布の炒め物）」や、地元で獲れる魚を昆布で巻いた「クープマチ（昆布巻き）」ほか、豊富な昆布料理が家庭に根づいている。

富山県では、おにぎりに巻くのは

海苔ではなくとろろ昆布。黒部市にある株式会社四十物昆布の四十物直

の社長によると、「昆布は子どもころから食べつけている家庭の定番」だそうだ。

「鍋に大根、人參、昆布をたくさん入れて煮込んだものを毎日煮返して食べるんです。それが富山の食文化。栄養も一度に摂れます。この辺は共働きの家庭が多かったので、昔からの知恵でしょう」

また、富山県射水市の中六醸造元が製造する醤油が、甘口であるという興味深い事実にもぶつかった。甘

い醤油といえば九州だが、四代目・

板林勇樹さんいわく「当社の創業者は、修業先の『味は地元の人の好みに合わせなさい』という言いつけに従ってこの味を決めたそうです」。

北前船の寄港地だった放生津に甘口醤油が根づいているのは、薩摩との交流を意味づけるものではないだろうか。

日本近代化の礎となった壮大な「昆布ロード」は、同時に日本の食文化を広げた道でもあった。今回の取材で昆布を見る目が変わりそうだ。（2016年7月20～21日、7月25～26日取材）

船が運んだ琉球の飲食文化

真茶平 房昭さん（琉球大学教授）

琉球に往来した薩摩廻船は、食材の昆布やかつお節、茶・煙草などの嗜好品のほか、鉄鍋・髪油などの生活雑貨を運んだ。他方、琉球からは

特産の黒砂糖を中心に薬用ウコン（鬱金）や藍染め用の藍玉、中国産の薬種その他の唐物が積み出された。藩へ納める年貢米のほかに、鹿児島城下にある琉球館で売却された主力商品は黒砂糖である。つぎに「茶」と「昆布」に焦点をあて、近世の琉球を

茶の流通

めぐる交易品の流通に結ばれた飲食文化の一面を見ていこう。



昆布を豚肉や野菜と炒めて食べる「クープイリチー」

熊本県人吉市と球磨郡一帯で作られた球磨茶は、琉球でも広く流通した。人吉藩では1804年（文化元）に茶の「専売制」をしくが、この流通規制のおりを受け、琉球でも茶の品不足が深刻化した。専売制から

2年後、琉球王府の役人が薩摩藩に要請した史料（琉球館文書）によると、琉球では諸士から庶民にいたるまで球磨茶を常用してきたが、出荷停止となったため薩摩産の茶を取り寄せたが、風味香りに乏しい。そこで琉球へ積み出す茶のうち、特に望む者のために「六百俵」分を球磨茶とし、ほかを薩摩産としたという。

その後、人吉藩の勘定奉行田代善右衛門の「備忘録」によれば、1818年（文政元）に球磨茶の直買いを希望する琉球館と3年契約を結んでいる。これを仲介した「求麻問屋」の渡辺喜兵衛は、人吉藩の産物を扱う薩摩商人であったという。武井弘一氏の研究によると、球磨茶は緑茶のなかでも香りが強い種類で、そのた

め琉球でも人気があったようだ。

こうした香りの嗜好にマッチした球磨茶のほかに、ジャスミンの香りが特徴の中国茶（サンピン茶）が福州から大量に輸入された。王国末期の統計によると、1877年（明治10）上半期だけで日本茶、中国茶あわせて23万7545斤（約14万2527kg）が那覇港に輸入されたことがわかる。

日本列島の昆布流通圏

南から北に視点を転じると、18世紀に蝦夷地開発のフロンティアは、襟裳岬を越えて東へと拡大した。そのころ大坂から瀬戸内海、下関、日本海沿岸を経て松前、函館まで往来



中六醸造元の四代目・板林勇樹さんと同社の甘口醤油商品



四十物昆布社長の四十物直之さん。昆布だけでなく昆布ロードの歴史についても講演する機会が多い



陶器がつなぐ奥州と東海

東北地方は米や鉱物など豊かな資源に恵まれ、それらを日本各地に送り出す一方で、衣料品や醸造食品、陶磁器などさまざまな工業製品を受け入れてきた。東北学院大学教授の斎藤善之さんは「すでに古代末期の12世紀には東海地方から東北地方に向けて大量の陶器が送られていたことがわかってきました。奥州藤原氏の拠点であった平泉から常滑焼と渥美焼が大量に発見されたからです。江戸時代になると仙台藩の米が廻船で江戸に運ばれ、帰りには江戸から古着や薬、陶器などさまざまな物資がこの地にもたらされました。北上川流域には今でもその当時の記録や痕跡がたくさん残されています」と語る。そこで斎藤さんにコーディネートと東北の取材同行をお願いし、北上川流域における中世と近世、二つの時代にまたがる陶器の流れを追うことにした。

平泉で大量消費された 中世の常滑焼と渥美焼

東北地方最大の河川、北上川。はるか昔より悠々と流れるこの大河は水上の道として利用されてきた。12世紀（平安時代末期）、北上川中流の平泉を拠点に東北地方を掌握していた奥州藤原氏は、太平洋の海運と北上川の水運を活かして遠隔地と結びつくことで、その繁栄を築いたといわれている。

その証拠の一つが、平泉の遺跡群から発見される東海産の常滑焼や渥美焼の出土品だ。この時代、重くて壊れやすい陶器を900kmも離れた東海から東北まで大量に陸上輸送することは不可能だった。これらは船で太平洋を渡り、さらに北上川を遡って平泉にもたらされたと考えられている。

斎藤さんから「中世の常滑焼と渥美焼に詳しい人」と紹介されたのが愛知学院大学非常勤講師の中野晴久さん。編集部は、知多古窯址群の一つ「大池古窯」で中野さんのレクチャーを受けた。

中野さんは「中世において、常滑焼と渥美焼は大甕や壺をつくる技術



山を掘り抜いて地中に築かれた「大池古窯」の4号窯(左)と5号窯を下から見る。手前で燃料の木などを燃やし、その焰が上に乗っていく



愛知学院大学の非常勤講師を務める中野晴久さん。中世の常滑焼・渥美焼を長年研究している。右は上から見た4号窯。トンネルになっているところが「焼成(しょうせい)室」で、奥の平らな部分で甕を、手前の傾斜面で茶碗などを並べて焼いた



で他の窯業地を一步リードしていった」と話す。

常滑焼は平泉の隆盛と同じ12世紀初め、愛知県知多半島の穴窯(あながま)で製造されるようになった。半島全体が粘土や砂の堆積した地層で、非常に掘りやすく、窯をつくるのに適した地盤だった。そのため、常滑を中心に3000基を超える穴窯が次々とつくられた。これは同時代の窯業地と比べても圧倒的な数だ。

「常滑焼に使われる土は、粘度が高く低温で焼き締められることから、大きくて堅牢な甕を安定的につくることができました。もう一つ革新的だったのは、焼締めの甕を赤色に焼きあげる技術を手に入れたことで

す」と中野さんは言う。

それまでの甕は、灰色や黒っぽいものばかりだった。常滑焼の工人たちは、窯内の空気の流れをコントロールすることで表面を酸化させて「赤く」焼きあげること成功し、実用性、デザイン性ともに優れた常滑焼が全国に流通するようになる。

一方、知多半島に向き合うように延びる渥美半島でも、同じ時期に窯業が盛んになったが、常滑ほどいい土に恵まれず大量生産はできなかった。代わりに連弁文(れんべんぶん)や袈裟襷文(けさすまもん)など、ほかにはない文様の壺が生み出され、評価されるようになる。

「常滑焼は既製品、渥美焼はオーダーメイドというイメージです」と中野さん。国産の陶器では時代の先端をいく高級品として需要が高く、なかでも圧倒的な消費地が平泉だった。

武士の台頭で陶器が必要に

なぜ平泉で常滑焼、渥美焼が大量に消費されたのか。斎藤さんの紹介で平泉町まちづくり推進課の八重樫忠郎(ただお)さんにお会いした。

八重樫さんによると、その背景には、武家と酒の密接な関係があった

斎藤 善之 さん
さいとう よしゆき
東北学院大学経営学部 教授



1958年栃木県生まれ。1981年宇都宮大学教育学部卒業。1987年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。1995年「内海船と幕藩制市場の解体」で早大博士(文学)。日本福祉大学知多半島総合研究所嘱託研究員などを経て現職。専門は日本近世史、海運港湾史。主な著書に、「海の道、川の道」(山川出版社2003)、「日本の時代史17近代の胎動」(吉川弘文館2003、共著)など。

という。12世紀は、武士が勃興した時代だ。武家にとって酒宴は政治的な場として重要だった。酒の席で序列を決め、主従関係を明確にし、強い武家が権勢を拡大していった。

酒宴が行なわれていたことを裏づけるのが、平泉各所で発掘される「かわらけ」という小さい素焼きの器。武士の酒席では、かわらけを使い捨てるの杯として使うのが習わしだった。平泉の柳之御所遺跡(やなぎのみどころのしよせいせき)では、10トン以上のかわらけが山積みで見られたという。いかに酒宴が多かったかが窺える。

酒は武家に欠かせないとすれば、



5



4



6



2



1

1 柳之御所遺跡で出土した渥美焼の大甕。高さ90.4cm、推定口径54.0cmで渥美産としては最大のもの 2 平泉町内の遺跡から出土した常滑四耳壺(しじこ)。平安時代後期のもの 1、2 平泉町教育委員会蔵 3 平泉を代表する土器「かわらけ」。清らかさが尊ばれたため、一度きりの使い捨て食器と考えられる 岩手県教育委員会蔵 4 武家社会の隆盛と常滑焼・渥美焼の関係を語る平泉町まちづくり推進課の八重樫忠郎さん 5 平安時代末期に奥州藤原氏が政治を行なった場所と考えられている柳之御所遺跡 6 柳之御所遺跡の裏手にある低地。湊の跡と考えられる



3

奥州藤原氏が展開した ダイナミックな海運交易

屋敷で大量の酒を貯蔵あるいは製造していたことは想像に難くない。貯蔵容器となる大甕や、酒を注ぎ分ける際に使う甕・壺として常滑焼・渥美焼が重用された。立派な壺や甕でふんだんに酒を振る舞うことが、武家の権威の象徴となった。

常滑焼・渥美焼は、どのように平泉まで運ばれたのだろうか。

斎藤さんは「太平洋側は強い海流や季節風などの影響で難所が多いため、日本海のような船による交易はなかったと考えられていました。ところがその説を覆し太平洋側にも海上交通の道があったことを立証したのが平泉の常滑焼や渥美焼の大甕でした。そして房総半島の外側を回るルートもあったと考えられるようになりました」と言う。

八重樫さんは「中世の海運交易の全容をつかむのは難しいですが、近年の研究では、かなり広いエリアだったことがわかってきました」と語る。

例えば中尊寺金色堂の螺鈿細工に使われている夜光貝は、奄美大島か

ら平泉に運ばれたというのが今の定説だ。また金色堂の高欄(手すり)の部分は東南アジア産の紫檀(したん)でできている。中国からの壺や経典なども多数ある。12世紀の平泉は、豊富に採れる砂金や材木を武器に、東シナ海まで商圏を広げていたようだ。

「10世紀の『新猿楽記』という書物を見ると、金儲けのために全国を飛び回る自由な商人がすでにいたようです。もしかしたら12世紀には、私たちが想像するよりずっとダイナミックな交易ルートが確立していたのかもしれない」(八重樫さん)

柳之御所遺跡の見学を終え、近くのバイパスから周辺を眺めた。御所の方向に広がる土地に、一段低い段差のようなものがある。八重樫さんから北上川に開かれた湊の跡だと教えられた場所だ。

斎藤さんは「ここは北上川に注ぐ支流が合流する地点で、入江になっていたようです。そこに北上川からの船を碇泊させて荷を揚げおろしたのでしょう。しかも柳之御所遺跡もすぐ近くです。河口からはおよそ80kmの地点ですが、北上川は河床勾配がゆるいため、海拔は20mほどしか上がっていません。日本の川にしてはゆるやかで舟運には向いていた



のです」という。

陶器が つないだ 石巻と東海の縁

1984年（昭和59）、旧北上川の支流・真野川の上流にある石巻市水沼地区で3基の窯跡が発見された。水沼古窯と呼ばれるこの窯跡は、12

世紀前半、まさに平泉が常滑焼や渥美焼を東海から取り寄せはじめたころにつくられたものだった。八重樫さんによると、平泉の史跡からは水沼の窯で焼いた陶器も発見されていて、そこには渥美焼特有の袈裟襷文の文様まで施されていたそうだ。

奥州藤原氏はこうした優れた陶器を自分たちの手で生産したいと考えたのだろう。渥美焼の工人を石巻近郊の水沼地区に住まわせて、そこに窯をつくらせた。しかし水沼窯はわずか30〜40年で操業を停止してしまふ。その理由について、八重樫さんは水沼の粘土が愛知県ほど焼き物に適していなかったことを指摘する。「興味深いのは、水沼に来た渥美の工人らの子孫がこの地に定住したことで、その後も東海と石巻との文化的なつながりが長く続いたことです」と斎藤さん。

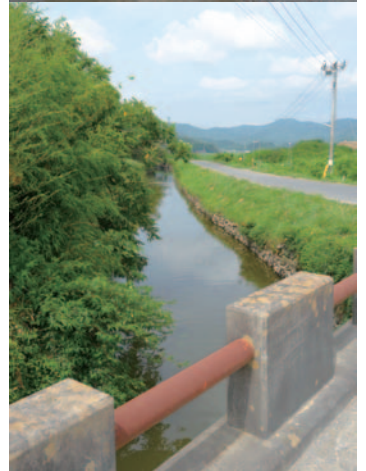
その足で水沼地区にある古刹、亀向山龍泉院を訪ねた。

龍泉院は知多半島の内海にある性海寺の末寺とされる。16世紀半ば、性海寺の和尚、天以乾齋が奥州に向かい水沼に至ったときに迎えた水沼の有力者、亀山伊勢が自分の山荘を与えて寺とした。それが龍泉院の創始と伝わる。

斎藤さんは「天以乾齋和尚が水沼を最終目的地としたのは偶然ではなかったのではないかと思います。亀山伊勢という名前にも伊勢湾、つまり東海との関係を感じずにはいられません」と語った。この地域に尾張姓や内海姓が多いとされるのも渥美の工人が移り住んだ名残だろうか。

「石巻では東海地方ゆかりの姓をもつ人が多いのです。そのなかには事業欲が旺盛な方たちも多かったです。後に北上川に内海橋をかけた水沼の豪農で酒造家でもあった内海五郎兵衛もその一人です」（斎藤さん）。

住職の泉孝雄さんも「昔の人は『お寺を見るなら松島の瑞巖寺か龍泉院だ』とよく言っていましたね。それほど由緒ある名刹として親しまれていたのです」と話してくれた。龍泉院には江戸時代につくられた常滑焼と伝わる大壺が今も大事に保



住職の泉孝雄さんから龍泉院と水沼地区の歴史を聞く斎藤さん

石巻市水沼地区で発見された窯跡「水沼古窯」。渥美焼の工人がつくったものと思われる



斎藤さんのリクエストで泉さんが特別に見せてくれた江戸時代の常滑焼と伝わる大壺。中世以来の縁を感じる

上：龍泉院は大正時代に火災に遭い本堂は焼失したが、立派な山門と鐘楼は今も残る
下：旧北上川と石巻市水沼地区をつなぐ真野川

管されている。平安時代末期の奥州藤原氏滅亡とともに平泉への常滑焼・渥美焼の流通は終わったが、尾張と石巻の結び付きまで途絶えたわけではなかったようだ。水沼地区の繁栄が、遠い東海地方とのつながりによって、もたらされていたことが見えてきたように思われた。

水運と陶器を追って 石巻・登米を歩く

江戸時代になると、石巻は北上川の水運の基点として、奥州随一の漆と称されるほどの繁栄を見せた。仙台藩から江戸に納められる御穀米は、最盛期には30万石にも及び、江戸で消費される米の量の3分の1にも達したという。これらの米は、一関や登米から石巻港を経由して、弁才船で江戸まで運ばれた。そのため東北に入る陶磁器類は、帰り荷として江戸で仕入れられるものが主流となった。

斎藤さんの案内で、江戸時代の陶器の流通の痕跡を追った。

石巻の廻船主「武山家」

江戸から明治期にかけて廻船主として栄えた武山家を継いだ本間英一

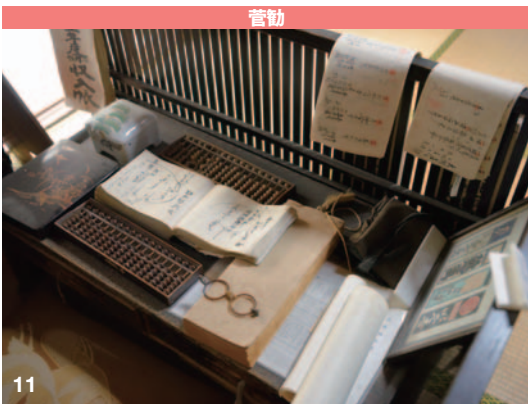
さんは、「石巻千石船の会」の事務局長も務めている。本間さんと斎藤さんは、武山家に残る『武山六右衛門家文書』を数年かけて解読し、一冊の本にまとめた。そこには千石船の積み荷の受領証や領収証なども含まれており、当時の流通を知る貴重な資料だ。これを見ると、たしかに江戸の商人から土瓶や茶碗などを仕入れていたことが記録されていた。

本間家（旧武山家）の土蔵に保管されている、貴重な古文書の原本も見せていただいた。

登米の廻船問屋「菅勸」

北上川の舟運の発展に伴い、河口の石巻と上流の盛岡周辺を結ぶ中間点として栄えたのが登米の湊だ。「河岸文化がよく残っているのです」と斎藤さんが言うように、登米は北上川の街道に沿ってつくられた武家町だ。今は堤防が高く川面が見えないが、かつては目の前に川岸が広がり、上りの舟と下りの舟が荷を積み替えていたはず。相当な賑わいだったに違いない。

「廻船問屋 菅勸資料館」は、館長の菅野紀男さんと兄の芳郎さんが運営しており、土・日曜日を中心に開館する町屋ミュージアムだ。陶器や



11



8



7



12



10

武山家



9

11 「廻船問屋 菅勸資料館」にある帳場。江戸時代の雰囲気が漂う 12 保管していた陶器を眺める館長の菅野紀男さん(右)と兄の芳郎さん(左) 13 登米市内を滔々と流れる北上川。どれほどの人がこの川を渡って荷を運んだのだろうか



13

7 武山家が1819年(文政2)に江戸の商人から購入した陶器類。江戸から千石船(弁才船)で運ばれたと思われる

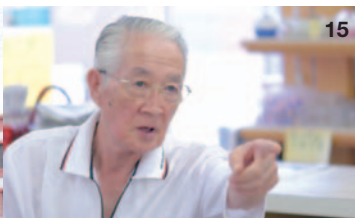
8 大船渡市の船大工・新沼留之進さんによって精巧につくられた千石船の模型

9 武山家に保管されていた江戸期の受取状。瀬戸物の大瓶1本、五升瓶1本、三升瓶2本などを受取ったと記されている

10 武山家に残る膨大な古文書を解読した本間英一さんと斎藤さん。史料を探すときも阿吽の呼吸だ



16



15

14 「尾張屋」店内に陳列された茶碗類 15 東日本大震災を乗り越えて商いを続ける近藤良一さん 16 東海との縁を感じさせる屋号の看板



14

尾張屋

観慶丸本店



17



18

17 被災した問屋街に積み荷の米を提供したお礼として江戸から送られた布袋像 18 観慶丸本店社長の須田佑さん 19 布袋像を特別に見せていただいた「観慶丸本店」(一般公開は原則的にしていない)

漆器、当時の帳簿など、往時の廻船問屋の商いや登米の文化の記録がそのままに残されている。「これだけの資料が残っているのは貴重だ」と斎藤さんは言う。石巻には老舗の陶器店が多い。「尾張屋」もその一つ。この地で古くから営業していた陶器店を、近藤良一社長の祖父母が買い取って今日に至る。店名の由来はわからないが、尾張と所縁がある可能性は高い。近藤さんが物心ついたころには、すでに鉄道が走り、駅から店までの運搬は荷車だった。しかし、かつて店の前が運河だったことを近藤さんは知っている。「50〜60年前、周囲の道路を舗装するために掘り返したら、

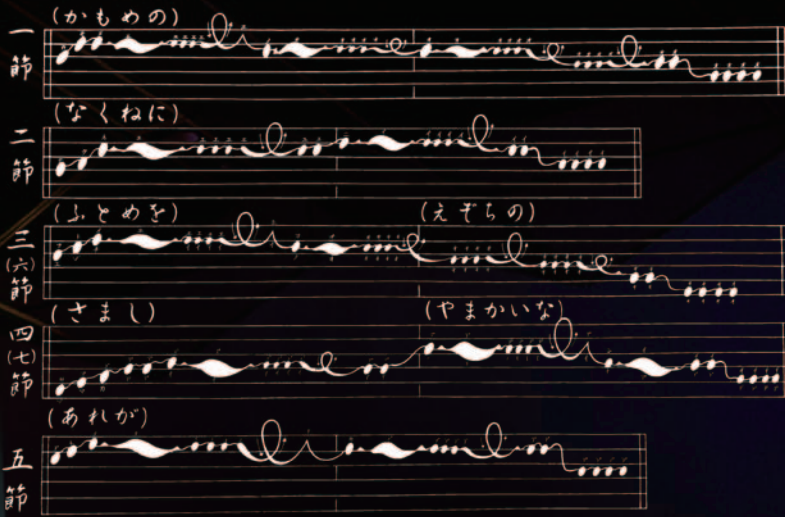
堀に使われていた厚い木の板が腐らずに出てきたのです。みんな驚いていましたよ」と語る。東日本大震災のあと、店をたたくつもりだった。「でもね、少し生活が落ち着くと、茶碗でご飯を食べたい、湯呑みでお茶が飲みたいと思うんです。そうか、みんな同じ気持ちに違いない——そう考えて再び店を開けました」(近藤さん)。石巻の陶器店・美術館「観慶丸本店」最後に訪れたのは観慶丸本店。この店の創業者、初代須田幸助は、先に紹介した武山家の船「観慶丸」の沖船頭(雇われ船長)だった。江戸時代、千石船の船頭は船主からも一目置かれる存在で、江戸からの帰りの

積み荷は船頭の裁量に任されていた。そこで目利きをして陶器を仕入れ、後に陶器店として独立したという。ある時、観慶丸が米を運んで江戸に入船しようとしたところ、江戸の問屋街が全焼する大火災があった。船頭の須田幸助は積み荷の米50俵を速やかに下ろしすべて提供した。そのお礼として江戸から数年後に贈られたという布袋像が展示してある。現社長の須田佑さんは言う。「正確な年代はわかりませんが、かなり立派な品物なので特注品だと思います。感謝の気持ちを伝えるために問屋街の人たちがお金を出し合っで、瀬戸あたりに注文したのでしよう。とてもいいお顔をされている。この布袋様は当家の宝です」

◆ 奥州と東海。遠く離れたこの二つの地域は、12世紀から陶器が縁でつながっていた。江戸の商人・河村瑞賢が幕府の命を受けて東廻り海運を成功させたのが1670年代。それよりもはるか昔から太平洋を行き来し、常滑焼・渥美焼、さらに工人や技術も導入しようと試みていたのだ。スケールの大きな交易と当時の人々の実行力に、圧倒される思いがした。(2016年7月27、28日、8月29日取材)

北前船が運んだ民謡

江差追分と小室節



「正調 江差追分節」の基本譜。追分の情緒を出すための重要な節「二声上げ」などが記されている。前唄、本唄、後唄の3部構成となっておりそれらをまとめて歌うことを「一本通し」と呼ぶ

人と荷を載せ、沿岸を船が行き来する。そうするうちに、形のないものも長い時間をかけて伝わっていく。その一つが「民謡」だ。はるか信州から日本海を介して北上し、北の大地に根ざした「江差追分」は全国大会を毎年開いており、その名を知る人もいるだろう。そしてその源流の一つとされるのが「小室(諸)節」。地元・長野県小諸市では、次世代に伝える活動も続く。「江差追分」と「小室節」が生まれた地をたどると、人から人へゆるやかに受け継がれた民謡という無形文化の成り立ちが垣間見えた。

ニシン漁に沸く港町で 歌い継がれてきた古謡

初めて「江差追分」を聴いたとき「口があくほどびつくりしました」。

そう話すのは、札幌出身で今年から地域おこし協力隊として江差町教育委員会に赴任した奥山さとみさん。

かもめの なく音に
ふとめを さまし

あれが蝦夷地の やまかいな
正調江差追分本唄の7節だ。これ

を2分半近くかけて歌う。奥山さんならずとも、江差追分を初めて聴く人だれもが、その悠揚として迫らぬ、雄大でゆったりしたテンポに驚く。

大海原をゆりかごに寝ていたら、

かもめの鳴き声に起こされ、彼方を見やれば北海道の山々が迫る――。

波にたゆたう船のように「かもめえ〜え〜え〜…」と長く節を引くのが、追分節ならではの歌い方だ。

その船とは、日本海沿岸および瀬戸内海と北海道を結んだ北前船。一説に、信州追分宿付近の馬子唄が北国街道を通じて越後に伝わり、参勤交代の北国武士、あるいは警女と呼ばれる三味線を弾き歌う目の不自由な女性たちなどを介して北前船の船乗りたちの舟唄に転じ、海を越え江差にも行き着いたとされる。

江差が北前船の交易港として栄え始めたのは江戸時代半ば、17世紀末から18世紀初頭にかけてのこと。

参考文献

「江差追分物語」(北海道新聞社)
「小室(諸)節考」(鬼灯書籍)
「追分節―信濃から江差まで―」(三省堂)
「日本の民謡と舞踊」(大阪書籍)

江差追分全国大会「入賞者の歌声 一覧」

各大会の見出しをクリックすると動画を見ることができる

<http://esashi-oiwake.com/national-conference/singing-voice>



「このあたりを治めていた松前藩は農民からの年貢取り立てではなく交易で経済を成り立たせていました」と江差町教育委員会社会教育課主幹の宮原浩さんが説明してくれた。

「交易を統制するために藩は、松前と函館と江差の3港を指定港として商人に交易の経営を請け負わせたのです」

本州への上り荷は主として海産物、本州からの下り荷は生活必需品。

とりわけ日本海に面した江差港は、ニシン漁の集積地として賑わった。

「ニシンは主に肥料として出荷されました。どろどろに煮たものを押し潰して粕を絞りとった。江差だけでなく、渡島半島の西海岸いたるところに加工場があり、江差港に集められ北前船で運ばれたのです」

なにを 夢見て

なくかよ 千鳥ネ

ここは江差の 仮の宿

(江差追分後唄より)

「入船三千、出船三千」と言われるほどの活況を呈した北前船の船頭や船子。ニシン漁で一攫千金を狙う日本海沿岸からの出稼ぎ漁夫。海の男や港湾職人を鼓舞する労働歌、ないしは港まちの夜を彩る遊興歌として、江差追分は連綿と歌い継がれてきた。

北前船が停泊した 天然の防波堤「鷗島」

江差が交易港として栄えたのは、北前船が停泊するのに絶好の地理的条件を備えていたからでもある。それが「鷗島」だ。日本海の波風を遮る天然の防波堤・防風壁であり、北前船の寄港地にうってつけだった。

鷗島があったからニシン漁に沸く江差には続々と船が乗りつけ、それを商いとすると人々が現れる。娯楽のない開拓地だから、遊芸人や遊女たちも商売になるだろうと渡ってくる。

人が人と呼ばひ、江差は「江差の五月は江戸にもない」といわれるほどの賑わいを呈した。

今は鷗島に陸続きで渡れる。老婆が神様から授かった瓶子へいし(注)のなかの水を海に注ぐとニシンが群れたとの伝説に基づく「瓶子岩」を過ぎたあたりに、北前船の係船跡が残る。打ち込んだ木杭は後から立てて朽ちたものだが、岩場に穿たれた穴は当時のままだという。

鷗島の上に登ると、日本海側に千畳敷が見下ろせた。岩場に碎ける波しぶきの向こうに、日本海の荒波を越えてきた北前船の姿を思い浮かべてみる。空にはカモメが舞う。江差

商人が北前船の船子たちへ飲み水を提供するため明治初頭に掘った井戸が残されていた。灌木の陰にひっそり佇む井戸が、北前船と鷗島と江差追分をつなぐ縁を今に伝えている。

節回しも歌詞も

明治までは各人各様

現在は函館在住だが江差に生まれ育った樹木医の館和夫さんは江差追分の研究家。北前船によって民謡が伝わった傍証となる文献の写しを館さんに見せてもらった。1843年(天保14)に住久丸の船頭・山本嘉右衛門が、日本海沿岸の各地で歌われていた民謡の歌詞を筆録したもので、昭和40年代半ばに島根県温泉津町小浜の旧家から発見された。後背地に石見銀山をもつ温泉津も北前船の寄港地として栄えた。

「松前節」として紹介されている歌詞のうち一つは、現在、江差追分の前唄まえうたとしてよく歌われる、

大島 小島の
間通る 船は

江差がよいか なつかしや

とほほ同じで、原型と比べてよい。

館さんによれば、明治年間までの江差追分は節回しも歌詞も「各人各

様」だったというが、大きく分けるならば三つほど流派があった。

「漁夫や船子相手の浜小屋という飲食街の遊興歌だった(浜小屋節)、花街の芸者や旦那衆が花街で三味線や踊りをつけ座敷唄にした(新地節)、町内北部の馬方や職人による(詰木石節)がありました。浜小屋

派は早くに絶えましたが、新地派と詰木石派は最後まで競っていたのです」

江差追分の歌詞は千とも二千ともいわれている。庶民の娯楽といえは飲んで歌って踊るくらいしかなかつた時代、各々の生活様式を背景に育まれ、長い年月をかけて歌い込まれ

(注) 瓶子

酒器の一種。上脗のふくらんだ細長い器で口元は細首。「へいじ」ともいう。



1



2



3



4

1 江差にニシンが押し寄せる伝説が残る瓶子岩。今は地続きとなった鷗島の入口付近にある 2 瓶子岩の少し奥にある北前船の係船跡。かつて江差にやってきた北前船はこの木杭に綱を結び停泊した 3 江差町教育委員会社会教育課主幹の宮原浩さん 4 江差町教育委員会の奥山さとみさん 5 明治時代中期～後期の鷗島(関川家写真より)。多数の船が木杭につながれているのがわかる 江差町教育委員会蔵



5

てきたのが土着の民謡だとすれば、かつての江差追分が千変万化の様相を呈していたのも不思議ではない。

地域ブランドによる まちおこしの先駆け

それが今日のような「七節、七声、二声上げ」と呼ばれる標準的な曲調に統一されたのは1909年（明治42）。実はニシン漁の衰退と関係がある。

「有志たちが郷土芸能をバネに人心を奮起し町勢を建て直そうとしたのです。各人各様の曲調では広まりにくいので基本を定めました」（館さん）
平野源三郎、村田弥六、高野小次郎ら名人たちの普及宣伝活動で江差追分の声価は全国的に高まり、1935年（昭和10）、江差追分会が発足した。戦後は「NHK全国のご自慢大会民謡の部で地元の柿崎福松師匠が日本一の栄誉を勝ち取ったのを契機に江差追分のすばらしさに改めて注目が集まり」（館さん）、1963年（昭和38）から「江差追分全国大会」が開催され今年で54回を数える。
江差追分会の会長は発足時から町長が務め、町役場の「追分観光課」が事務局だ。2016年4月現在、

全国各地に164支部（うち海外5支部）をもち、会員総数は3493名にのぼる。同課主幹の三好泰彦さんは、まちぐるみで江差追分を全国発信してきたことについてこう話す。「まさに今でいう〈地域ブランド〉によるまちおこし」。企画した昔の人たちの発想はすごいと思います」

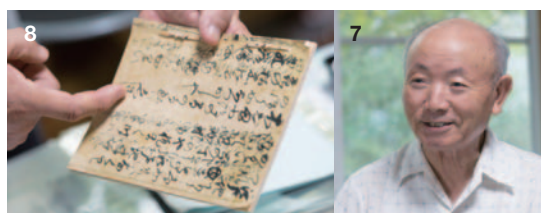
江差追分の源流を 信州小諸に尋ねる

ここでいったん江差から目を転じたい。北前船の上り荷と一緒に越後の寺泊港あたりに上陸し、いにしへの北国街道を南に遡ろう。江差追分の源流の一つとされる「小室節」のふるさと、長野県小諸市へと。

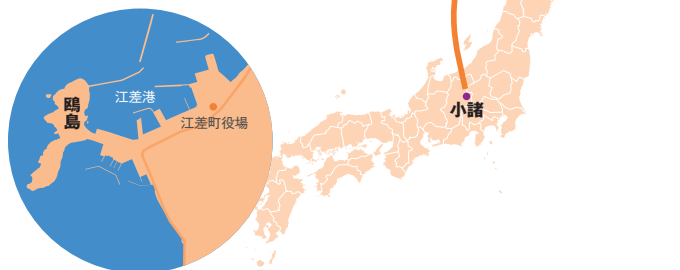
小諸出てみりや 浅間の山に
けさも 三筋の 煙立つ

（小室節歌詞より）

小諸市教育委員会生涯学習課の山東丈洋さんに小室節の起源を聞いた。「小諸近辺には東山道という古代の軍用道路が通り、平安時代の初めごろから朝廷に献上する軍用馬を飼育する『牧』と呼ばれる場所がいくつもありました。馬を育てる神様に捧げる祝詞形式の祭礼唄と、牧のなかで生まれた馬追いの唄が合わさって



6 1876年（明治9）に江差の間屋、村上三郎右衛門が掘った井戸。鷗島には水がなかったが、この井戸によって船乗りたちに飲料水を補給することができるようになった 7 館和夫さんは江差追分の研究者。江差追分会の学芸部門理事も務める 8 島根県温泉津町小浜の旧家から発見された文献の写し。日本海沿岸で歌われていた民謡の歌詞を筆録したもの



小室節の原型になったといわれています」

小諸はかつて小室と呼ばれていた地域。北国街道と北前船を経路とし、小室節↓追分（現・軽井沢）節↓信濃追分↓越後追分↓江差追分という伝播ルートがおおまかにたどれる。追分とは街道などの分岐点を指すが、中山道と北国街道の分かれ目にある宿場町「追分」が有名で、江戸時代にその付近で歌われていた馬子唄を三味線にのせて歌い出したのが追分節の名の起り。小室節は、追分節よりも少し早く成立していたのではないかと考える研究者もいる。

メディアのない時代、民謡の伝播に重要な役割を果たしたであろう馬

子とは、信濃路で幕府管理の宿場を経ず荷主と直取引で荷物を扱った運送業「中馬」を担った人たちだ。馬を操りながらの労働歌を聞いた宿場町に泊まった旅人や働く女性たちの口伝から広まったのかもしれない。

小室節の起源は諸説あるが、「正調小室節保存会」会長の中山喜重さんは〈渡来人起源説〉を紹介する。

「小諸市の御牧ヶ原にあった最大の牧でモンゴルからの渡来人が馬の飼育に携わり、望郷の念に駆られて歌ったのが原型ではないか、と。モンゴルの古謡『駿馬の曲』とメロディが酷似しているんですね」

長野県モンゴル親善協会会長でもある中山さんがモンゴルで小室節を





12



11



10



15

10「小室節」に歌われる小諸市から見た浅間山 提供：小諸市教育委員会 11 かつて軍用馬を飼育した小諸市最大の牧「御牧ヶ原」 12 小諸市中心部を通る現在の北国街道。佐渡の金を江戸に運ぶなど重要な役目を担い、小諸のほか追分や上田などに宿場町があった 13 小諸市教育委員会生涯学習課の山東丈洋さん 14 正調小室節保存会の会長、中山喜重さん 15 祇園祭で健速（たけはや）神社から出る神輿を正調小室節保存会が先導した写真 提供：正調小室節保存会



14



13

歌うと、現地の人は「なんとなくモングルの唄に似ている」と言うそうだ。生活や仕事から自然発生的に生まれた民謡の起源を定めることにこだわる必要はないが、遠い大陸の地と海を越えて唄の調べが共有されてきたと想像してみるのも興味がある。

小室節を「地元の方々にもっと知ってもらおうのが課題」（山東さん）。正調小室節保存会が小学校で出張授業をしたり、7月の祇園祭で健速神社より出る神輿を小室節が先導する伝統の神事が今年から復活するなど、地道な普及啓発活動が続いている。

物心ついたときから生活の一部だった

江差の割烹「味処やまもと」で山本滋さんの尺八を伴奏に、女将、康子さんの江差追分を聴いた。やはり生の歌声はいい。きつとこんなふう

に歌い継がれてきたのだ。遠来客が求めればお二人は披露する。康子さんは全国大会にも毎年参加。「両親が唄っていたので物心ついたときから生活の一部でした」。

全国大会には中学生以下の少年大会もあり、今年は50人が参加した。

民謡もポピュラーミュージックに相違ないが、無拍子で節を長く引く江差追分は今どきの流行りの音楽とはあまりにも遠い。それが若い世代にも自然に受け継がれている。いくら幼いころから接する機会があっても楽しくなければ歌おうとはしないだろう。民謡に魅かれる心が日本人の遺伝子には埋め込まれているのか。

江差追分会学芸部門理事の館さんは北海道新聞の記事「江差追分の未来像」で「この唄が持つ伝統の力を信じながら（中略）表現の多様化に取り組むべきだろう。洋楽や他の芸術分野の協力も得て、江差追分を核としたさまざまな形の音楽や芸術作品を制作し発表する試みをもっと盛んにしてほしい」と述べている。今年から始まった青森県五所川原市の津軽三味線会館へ出向いての「ジョイントライブ」などはそうした試みへの第一歩だろう。

信州の山で生まれた唄が幾多の変容を重ね海の唄となって北の大地に根つき、全国へとその真価を広めた。かつて本州から北海道へと渡る北前船の下り荷の一つだった民謡は時代の荒波を乗り越え、今また、より広い世界へと届く上り荷として未来への航海を続けようとしている。

（2016年8月18日、9月6～7日取材）



鷗島の高台から外海（日本海）を望む。北前船が係留していた内海側より数段強い風が吹いていた。鷗島は日本海からの風を防ぐ天然の良港となったことが体感できる



江差追分を歌う山本康子さんと尺八で伴奏する山本滋さん。康子さんは「江差追分は声の質など気にせず自由に歌っていいものです」と言う

古式捕鯨にみる

「人の行き来」と「技の伝播」

かつて鯨も魚と同じように、「海からの贈り物」として食されていた。この日本で鯨の産物を商品として流通させるために組織的な捕鯨が始まったのは戦国時代後期。手漕ぎの鯨舟や網を用いた捕鯨法は江戸時代を通じて発展していくが、その裏には、船を介して新たな技法を取り入れ、腕の立つ者たちも呼び寄せた歴史がある。太地町を中心とした紀州（注1）、網の専門家集団であり操舟にも長けた備後（注2）の田島、そして江戸時代に国内最大の鯨組と呼ばれた益富組が本拠地とした西海漁場（注3）の生月島を巡った。

古座川の河口から3km上流にあるご神体「河内様（こおつたま）」を目指す「御舟（みふね）」。古式捕鯨の鯨舟に装飾を施したものだ

古式捕鯨の始まりは伊勢湾沿岸だった

鯨を捕える「捕鯨」は危険を伴うが、なにしろ巨大なので肉や脂が大量に手に入る。江戸時代には「一頭とれると七浦潤う」といわれるほどの収益があった。しかし鯨を捕えるには多くの人たちが自らの責務を果たし、組織的に動く必要がある。海のそばの高台で海を見張る山見はひとたび鯨を発見すると、狼煙や法螺貝で海上の鯨舟に指示を送る。鯨舟はバラバラではなく集団で鯨を追いかけていく。実に多くの人たちの、しかも統率のとれた共同作業が必要なのだ。

日本の捕鯨の歴史は三つの時代に分けられる（注4）。①漁師たちが臨時的に組織を整え、鯨を地域に分配する「初期捕鯨時代」。②鯨の産物を商品として流通させるため、専業の捕鯨集団「鯨組」を組織した「古式捕鯨業時代」。③ノルウェー式砲殺捕鯨法を主とする「近代捕鯨業時代」。ここでは、②古式捕鯨業時代（以下、古式捕鯨）に絞って話を進める。

古式捕鯨の始まりの地は、戦国時代後期（1570年代初頭）の伊勢湾沿岸とされる。平安時代末期の治承・

（注1）紀州

紀伊国（きいのくに）の別名。和歌山県全域と三重県の一部。

（注2）備後

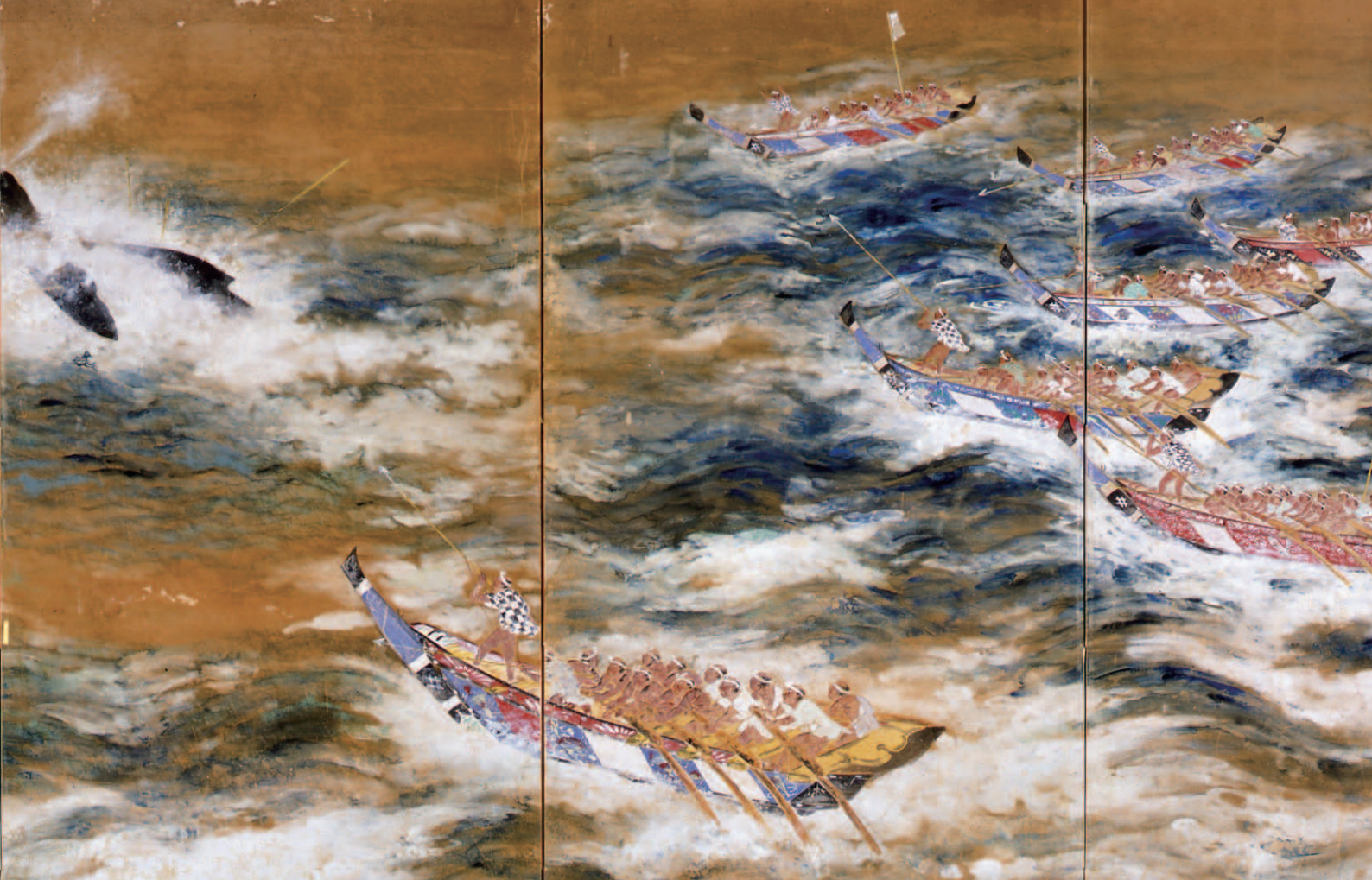
現在の広島県の東部を指す。律令国の備後国に相当する福山市、尾道市、府中市、庄原市、三次市、三原市など。

（注3）西海漁場

北限は山口県萩市の見島と対馬、南限は五島諸島南端の福江島や長崎県西彼杵（にしそぎ）半島西岸の外海（そとめ）地方の海域を指す。

（注4）三つの時代区分

諸説あるが、本稿では中園成生さんの著書「くじら取りの系譜（改訂版）」（長崎新聞社 2006）に従った。



古座で生まれ育った上野一夫さん

和歌山県・太地町 古式捕鯨の鯨舟に 装飾を施した「御舟」

和歌山県・太地町

2016年7月下旬、編集部は和歌山県南部の古座川河口にいた。古座川流域の5地区が担い手として昔から行なわれてきた伝統祭礼「河内祭」を見るためだった。河内祭の「熊野水軍古座河内祭の夕べ」の実行委員長を務める上野一夫さんは、「河内祭を調査した大学の先生は『自然崇拜の形を色濃く残す、相当古いもの』と言います」と話す。

河内祭には国の重要無形民俗文化財「御舟行事」がある。御舟とは、河口から3kmほど上流の川のなかにあるご神体「河内様」の神が宿る神額を運ぶ大切な役目を担う。実はこの御舟、古式捕鯨の鯨舟に装飾を施したものだ。全長約11m、幅約2mの杉づくりで、船底は浅瀬の多い古座川を遡れるよう少し浅くしてある。

古座地区もかつて古式捕鯨が行なわれた場所で、鯨組「古座鯨方」があった。上野さんは「鯨の肉は七輪

寿永の乱(注5)で水軍が活躍し、組織的な操舟技術と高度化した鉄製の武器が古式捕鯨につながったといわれる。

江戸時代初期、古式捕鯨は熊野水軍(注6)の伝統が残る和歌山県の太地浦(太地町)に伝わった。1606年(慶長11)の和田忠兵衛頼元がその嚆矢とされる。当時の捕獲方法は、鯨舟が手投げの鉾でダメージを与えて鯨を捕える「突取法」だった。1616年(元和元)、紀州の鯨組が西海に進出したという記録がある。

1677年(延宝5)、和田忠兵衛頼元の孫、太地角右衛門頼治が突取法に網を併用した「網取法」を開発する。ひたすら鯨を追いかけて鉾を打ち込んでいたものを、鯨を網にからませて動きが鈍くなったところで鉾を打ち込むのだ。網を併用することで捕獲率が高まった網取法は、太地が起源とされている。

古式捕鯨の主要漁場



(注6) 熊野水軍

熊野海賊ともいう。豊富な材木と良港をもつ熊野地方では古くから水軍が発達。中央政界の動向とも密接に関係した。

(注5) 治承・寿永の乱

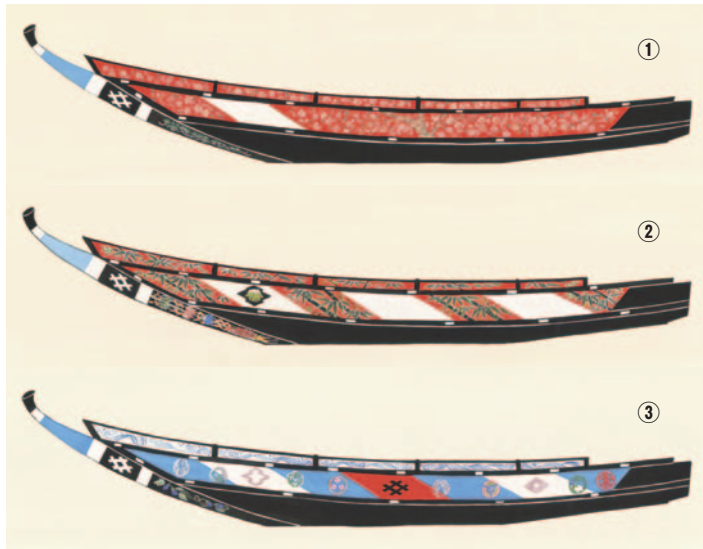
1180年(治承4)の源頼朝の挙兵から1185年(元暦2)に平氏一門が壇ノ浦で滅亡するまでの大規模な内乱。源平合戦、源平の戦いとも呼ぶ。



山見跡で説明する太地町歴史資料室学芸員の櫻井敬人さん



燈明崎(とうみょうざき)の「山見跡」。太地の鯨組は燈明崎と南にある梶取崎(かじとりざき)から鯨の到来を見張った



太地鯨舟の華やかな姿を描いた『太地鯨舟図絵』

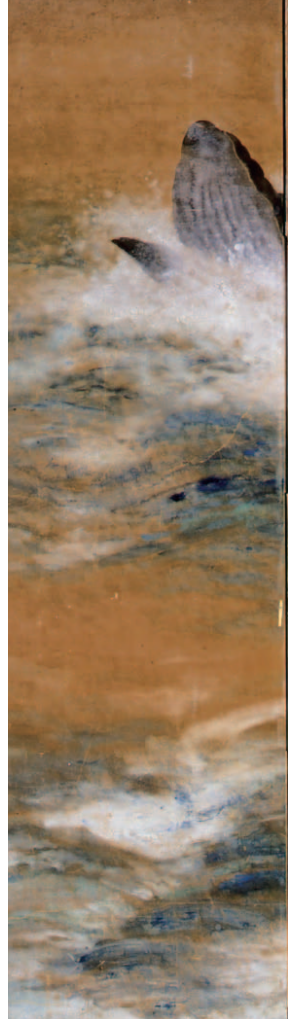
勢子舟(八丁櫓、15人乗り)

- ①勢子一番換え舟「赤地に桜」
- ②勢子二番換え舟「赤地に大竹」
- ③勢子三番換え舟「紋尽くし」(紋の詳細は不明)

※いくつかの絵画資料をもとに、和紙に岩絵具で表現したもの(画:土長けい)

※太地町立くじらの博物館の企画展「鯨舟:形と意匠」図録より

太地町立くじらの博物館蔵



『熊野太地浦捕鯨図屏風(くまのたいじうらほげいずびょうぶ) 渡瀬凌雲筆』(4曲1隻)。太地鯨組の末裔から指導を受けた日本画家・渡瀬凌雲はできるだけ正確に古式捕鯨の様を描こうとした 太地町歴史資料室蔵

で焼いて生姜醤油で食べたもんや。ご馳走でもなんでもない、普通の食べものだったよ」と話す。

御舟の存在を教えてくれたのは、太地町歴史資料室学芸員の櫻井敬人さん。アメリカのニューベッドフォード捕鯨博物館で学芸員を務めたあと、太地町に移籍した若き研究者だ。幔幕(注7)やノボリ、笹飾りなどで装った2隻の御舟が法螺貝の音色を響かせながら出航する様を一緒に見守った。

船を極彩色に彩るのは鯨を成仏させるため?

翌日、櫻井さんに改めて太地の古式捕鯨についてお聞きした。「人が舟を操る古式捕鯨は、鯨が陸地に近づいたり、泳ぐ速度をゆるめたりするところでない」と成立しませんが、全国に何か所かそういう場所があり、太平洋岸では太地や古座などの熊野灘がその一つでした。シーズンは冬です。冬至のころが一番よい。夏、北の海で餌を食べて太った鯨が、冬にこの付近を通って南の海に南下するからです」

網取法が編み出されてから、太地には、鯨を網に追い詰めて鉞を打つ

刃刺(注8)が乗る「勢子舟」、仕留めた鯨を2隻で挟んで固定して運ぶ「持左右舟」、鯨網を仕掛ける「網舟」、網や鉞網に結ばれた樽を回収する「樽舟」など役割や機能が異なる種類の鯨舟が生まれた(注9)。いずれもきらびやかな彩色が施されているが、櫻井さんはこれが熊野の特徴だと言う。

「のちに栄える九州の西海の鯨舟は、色こそ塗ってあるものの、ずっと簡素です。つまり極彩色に彩っても鯨が獲りやすくなるわけではない。ではなぜ色鮮やかにしたのか。私は熊野という独特な宗教的世界観をもつ風土がそうさせたと考えています。かつて熊野の人々は南の海に向こうに観音様が住む『補陀落浄土』(注10)があると信じていました。その清らかな世界に通じる熊野灘で鯨という巨大な生きものを殺生する——殺生は仏教で忌み嫌われる行為ですね。鯨とりたちは鯨が死ぬときに『南無阿弥陀仏』と唱えたと古文書にある。つまり船をきらびやかにして絵まで描くのは『捕えた鯨にあの世の光景を見せることで成仏を願った』のかもしれない」

太地では、鯨組の役職は世襲制だった。例えば刃刺は親が刃刺でなけ

(注10) 補陀落浄土

南方海上にあるという観音の浄土のこと。補陀落世界へ往生しようとする信仰によって、舟に乗って熊野那智山や四国足摺岬、室戸岬などから出帆する「補陀落渡海(とかい)」も行なわれた。

(注9) 鯨舟の種類

鯨舟の名称や漢字はさまざまだが、本稿では『鯨とり—太地の古式捕鯨—』(和歌山県立博物館)に従った。

(注8) 刃刺

羽指、羽差、波座士とも書く。

(注7) 幔幕

式場や昔の軍陣などで、周囲に張り巡らす、横に長い幕のこと。

れば子も刃刺りにならない。「たんに鯨が獲ればよいのではなく、村落のヒエラルキーも関係したようです」と櫻井さん。また、銆など漁具の種類が多いのも太地の特徴だ。

広島県福山市・田島

西海へ出稼ぎに行った「網」と「操舟」に長けた人々

太地から西に向かい、半島を回ると瀬戸内海だ。ここに西海捕鯨の隆盛に大きな役目を果たした島がある。広島県福山市内海町の田島だ。

「この島の先人たちは、江戸中期から200年以上も西海への出稼ぎを続けました。村上水軍(注11)の末裔なので行動エリアが広いのです」そう語るのは医師でスタッフフォロ

ド大学客員教授も務める宮本住逸さん。田島出身の宮本さんは、古式捕鯨に用いられた網舟「双海船」や鯨網の復元などに取り組んでいる。

田島が重要だったのは「網」だ。網取法が広まった当時、西海では麻の一種・苧おで大きな網をつくる技術がなかった。しかし瀬戸内海では鯛を捕まえる「縛り網」という大網があった。そこで田島の網職人が雇わ

「西海と比べるとバリエーション豊富です。銆の種類や大きさを細かくすればお金も労力もかかりますが、鯨舟の装飾と同じく、古来のルールを守る傾向が強かったようです」

れた。西海の鯨網は縦横18尋じゅう(32m)四方の網を一反とし、それを藁紐わらでつないだ19反の網を一隻の双海船に積み込んだ。

「呼子(注12)の史料では、鯨組・中尾家が『田島ナヤ(納屋)』を建てていました。それほど田島の人材を欲したようです」と宮本さん。田島の人たちが重用されたのは、干満の差が激しく流れが速い瀬戸内海で巧みな操舟技術を会得した優秀な漕ぎ手でもあったからだ。

「毎年7〜8月に田島を発ち、西海で網をこしらえながら冬の捕鯨に備え、シーズンが終わる翌年4月に戻ってくる。つまり年間8〜9カ月は出稼ぎをしていたわけです」

田島に戻る春は鯨組から借りた双海船に分乗し、夏にまた同じ船を操って西海に向かう。賃金や経費の精算は、帰郷するときに鯨組の金庫番が付いてきて庄屋と行なう。庄屋は



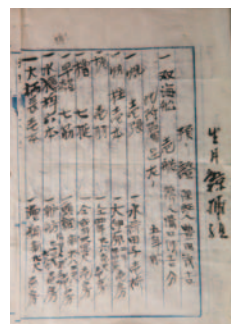
内海町横島の「シヤゴシの浜」。西海捕鯨の漁が終わると田島の人々は舟で戻ってきて、この浜に係留していた



田島の大浦八幡神社にある寄附碑。これは五島捕鯨会社からのもの。そのほかに西海の宇久島(うくじま)や対馬など古式捕鯨ゆかりの地からも寄附があった



双海船や鯨網の復元など2014年、網大工・兼田四郎さん(中央)が復元した「鯨網」



内海町歴史民俗資料展示室にある「生月捕鯨組預り證」(1902年[明治35]。戸田家)。双海船からノミ一丁に至るまで詳細に記されている

各人に貸与した8〜9カ月分の食費などを引いた残りを、本人ではなく妻に渡す。宮本さんは「男に金をもたせたら何に使うかわかったもんじやないですからね」と笑いつつ、「田島と西海の結びつきはシステムとして確立していたと見ていい」と付け加えた。実際に「生月捕鯨組預り證」という文書も残っている。

一本の電話で蘇った西海捕鯨の記憶

ところが、こうした田島と西海の

歴史も一時は忘れられていた。止まっていた時計の針が動き出したのは、約20年前。呼子町の役場からの一本の電話がきっかけだった。

「幕末から明治期に呼子で亡くなった田島の人の墓がある」という電話でした。ところが皆、昔のことを知らない。町全体が『なぜ墓が?』となりました」

宮本さんたちが島内のお年寄りに聞いて回ると、90代の人たちが西海への出稼ぎを覚えていた。「それから対馬や壱岐、五島列島を巡りました。西海の人たちが手厚く葬ってください

(注11) 村上水軍

中世に瀬戸内海で活躍した海賊衆。能島(のしま)・因島(いんのしま)などを本拠地とした村上氏一族を中心に、室町幕府などから海上警固を命じられ、勢威をふるった。田島は能島系とされる。

(注12) 呼子

佐賀県唐津市呼子町。呼子町の捕鯨の歴史を紹介する資料館「鯨組主中尾家屋敷」がある。



つたので、各所で墓が残ってしまいました。死因は伝染病と捕鯨中の事故が半々のようです」

西海に赴いた田島の人たちは、少

なく見積もっても年間1000人は下らないだろうと宮本さんは言う。次に訪れた生月島で、編集部はその足跡を目の当たりにする。

きわめて合理的な産業システム

「このあたりなのですが……」

勢いよく伸びる夏草を踏み分けつつ案内するのは、平戸市生月町博物館島の学芸員、中園成生^{しげお}さん。生月島の文化である捕鯨などの民俗を研究している。

「ありました！これです」

額に汗した中園さんが指さす先には、草に半ば覆われた墓石があった。風化しているものの、「田嶋（島）磯屋佐助」という墓碑銘は読み取れた。田島から働きに来て、生月島で亡くなった人のお墓だ。「申し訳ないのですが、できるだけ風化を防ぐために普段は横倒しにしているのです」と中園さんは語った。

このそばに、江戸時代に日本最大の鯨組と称された益富組の「納屋場跡」がある。鯨は波打ち際で解体され、浜辺には鯨を加工する大納屋、

小納屋のほか、鯨舟や網といった道具を修理する前作事場^{まえさくじば}、従業員が暮らす長屋が並んでいた。

「当時は一つの鯨組で500〜600人が働いていました。益富組は最盛期に鯨組を五つ抱えていましたから、3000人を超える人を雇っていたようです」と中園さん。

西海では紀州からさほど遅れることなく突取法、次いで網取法による古式捕鯨が行なわれていたが、生月島で本格的に捕鯨が始まったのは豊屋（益富）・田中組が操業した1725年（享保10）。やや後発だが鯨油に絞った点特徴だ。

「これは西海全般にいえることです。が、紀州や土佐が鯨肉を主としたのに対し、こちらは徹底的に鯨油です。まず脂肪層を含む皮をはぐという解体法は西洋のやり方と同じです」

鯨油を採って流通させることを主目的とするため、西海の古式捕鯨は産業としての色合いが非常に濃いと

中園さんは言う。田島の網職人のような、それぞれの職務に適した人材を各地から集めていた。

「刃刺は、太地では世襲制、土佐は実力があれば登用される能力主義。ところが、益富組は潜水漁業の盛んな漁村からスカウトしていました」

刃刺は弱った鯨の背にとりつき、鼻を抉^えって網を通す大事な役目を担った。泳ぎが達者で豪胆な者でないと務まらない。そこでヘッドハンティングしていたのだ。

「鯨舟の裝飾が簡素なのは費用を惜しんだからですし、銛は消耗品と考えて柄には丸太をそのまま使っている。利潤の追求は徹底しています」

鯨油は農薬として九州諸藩に販売され、食用の部位は関門海峡を抜けて瀬戸内海沿岸や大坂に出荷されている。益富組は手船^{てぶね}と呼ばれる運搬船を保有し、行き来するなかでさまざまな物資も購入し、生月島に戻っていく。生産と流通を一体化した益

富組は現代の企業と変わらない、先進的な活動を行っていたのだ。

鯨が激減したことで益富組は1874年(明治7)に捕鯨業から撤退するが、それまでに捕獲した頭数は2万頭、収益は330万両に上るといふ。平戸藩にとっても古式捕鯨は大きな収入源だったろう。

隠れなかった 「かくれキリシタン」

益富組がもたらす仕事は島民も潤した。鯨は余すところなく利用(注13)できたので、加工は島民も担っていたはずだ。これが生活の助けになり、島民の「かくれキリシタン信仰」(以下、かくれキリシタン)を守った面があることは知られていない。

「かくれキリシタンと聞くと、真夜中に人目のない場所に籠ってオラシヨ(お祈り)を唱える……そんなイメージを抱くと思いますが、生月島では屋外で行事をし、オラシヨも大きな声で唱えます」と中園さん。

その理由は、かくれキリシタン信者(以下、信者)の川崎雅市(まさいち)さんのご自宅を訪ねてわかった。一階の広間には祭壇が四つある。向かって右から、氏神様(お伊勢様)の神棚、かく



益富組の解体場を再現したジオラマ(島の館)。頭を陸側にして、轆轤(ろくろ)と大切(おおきり)包丁を使い、背中から剥いていく。解体の手順は13段階あったという。右上は江戸時代、日本最大の鯨組と称された益富組の納屋場跡。鯨の解体場があった海岸は御崎(みさき)漁港となった



田島から働きに来て生月島で亡くなった「田嶋(島)磯屋佐助」の墓石。横倒しにしているのは風化を防ぐため

れキリシタンの組(注14)のご神体である「御前様」、先祖様(仏壇・禅宗)、お大師様(弘法大師空海・真言宗)が並ぶ。この光景こそ生月島のかくれキリシタンのあり方を物語っていると中園さんは言う。

「かくれキリシタンは『宣教師がいなくなったあと、仏教や神道と混ざり合ってきた独特の信仰』と見なされていましたが、実はそうではありません。生月島の信者さんたちは、

かくれキリシタンとは別個に神道、仏教も信仰しています。つまりそれぞれの宗教・信仰が並存しているのです」

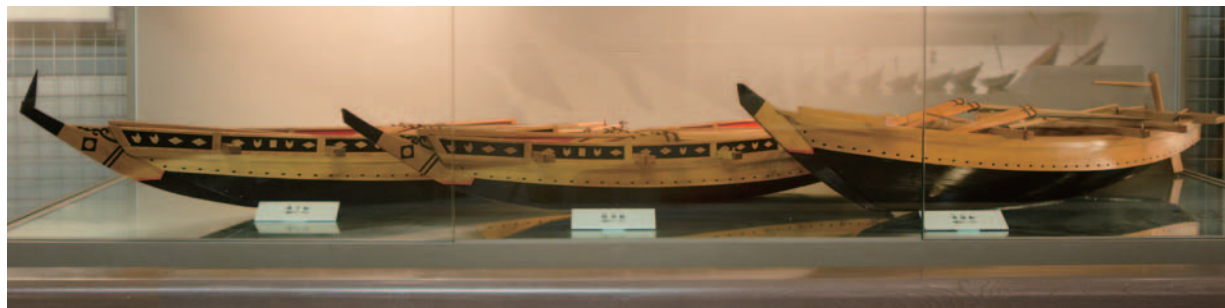
弾圧はあったが、他の地域に比べて、平戸藩はさほど苛烈ではなかったことも幸いした(注15)。

「平戸藩は、キリシタンかどうかの判断を『仏教を信仰しているかどうか』で決めていた節がある。だから並存を選んだ生月島の信者は信仰を

納屋場跡から少し離れた海岸にある益富組の網干し場「古賀江網干場」。平たい石を敷き詰めているのは、冬でも石が熱を帯びることで網が早く乾くからだ



平戸市生月町博物館 島の館の学芸員、中園成生さん



島の館に展示されている鯨舟。左から勢子舟、持双舟、双海舟(いずれも縮尺1/10)。太地の鯨舟とは違い、非常にシンプルな塗装だ

(注15) 平戸藩のキリシタン弾圧

初代藩主・松浦鎮信(しげのぶ)が幕府の禁教※より15年前の1599年(慶長4)に禁教に転じたため幕府から疑われず、監視も多少ゆるかったと考えられる。

※禁教

1612年(慶長17)および翌年に江戸幕府が発令した「慶長の禁教令」を指す。広義ではそれ以前の豊田秀吉による1587年(天正15)の「パテレン追放令」などもある。

(注14) 組

生月島の場合、「津元」(つもと)や「垣内」(かきうち)と呼ばれる組がある。20~50軒で構成され、そのなかに4~5軒からなる「小組(コンパンヤ)」という下部組織がある。捨てる部位がなかった。

(注13) 余すところなく利用

肉は塩蔵肉に、髭は提灯の取っ手や扇子の要に、尾の筋は綿打ち弓の弦に用いられるなど、鯨は捨てる部位がなかった。



かくれキリシタン信者の川崎雅市さん宅の居間。宗教・信仰の異なる四つの祭壇が並ぶ



生月島と平戸島の間にある中江ノ島。かくれキリシタンの聖地とされ、聖水はこの島で汲む。禁教時代初期（1622年と1624年）に平戸藩によるキリシタンの処刑が行なわれた



「行事では酒と肴は必須です。大きな行事ではおせち料理のようなものや団子、餅などもそろえます」と話す川崎雅市さん

組のご神体「御前様」。掛け軸仕立ての「お掛け絵」と呼ばれる聖画が奥にある。右手前にある鶴首の壺「お水瓶」には「サンジョワン様」と呼ぶ聖水が保管されている



太地町歴史資料室に展示されている「チキン・オブ・ザ・シー（シーチキン）」の缶詰。古式捕鯨が下火になったあと、アメリカへ渡った太地の人たちがその製造に従事した
太地町歴史資料室蔵

川崎さんが従事していた遠洋まき網漁業は、古式捕鯨と共通する点が多いと中園さんは考えている。「どちらも集団での漁です。一人だけファインプレーをしてもうまくい

「その後」に活きた 古式捕鯨のノウハウ

「一年で家にいるのは50〜60日ほど。あとはずっと船に乗っていました。オラシヨを覚えたのも船のなかなんですよ」と川崎さんは微笑んだ。

守ることができ、行事にもあまり秘匿性がないと考えられます」とはいえ、異なる宗教・信仰を並行するのは大変だ。神社や寺を維持しつつ、行事のたびに出費も嵩む。それでも生月島の信者たちが家や集落、信仰組織を維持できたのは、古式捕鯨やその後のまき網（巾着網）漁業（注16）で経済力を保てたことが大きい。川崎さん自身、16歳から50歳まで遠洋まき網漁業に従事していた。

「2016年7月23〜24日、8月2日、8月26〜27日取材」

紀州・太地から伝わった突取法・網取法は、田島がそれに適した網を人の行き来を介して提供したことで、益富組をはじめとする西海捕鯨の隆盛につながった。さらにその技やノウハウを活かす道を外国にも求めた。海という広大な空間を、船を操り生き抜いた先人たちの姿に、人間のしぶとさ、たくましさを感じる。

「一年で家にいるのは50〜60日ほど。あとはずっと船に乗っていました。オラシヨを覚えたのも船のなかなんですよ」と川崎さんは微笑んだ。

かない。まき網の漁獲物も遠方に販売し、資本をどう再投資するかを皆で考え、行政とも折衝して漁獲量を調整する。大人数が協力しないと目的が果たせないという点で古式捕鯨のシステムと似ています」
古式捕鯨がその後につながるのには、太地と田島も同じだ。捕鯨が下火になったあと、太地の人たちは、アメリカに渡り、ロサンゼルス港にできた缶詰工場でツナ缶などの製造に従事し、またオーストラリア・ブルーム町の真珠産業にダイバーとしてかわった。田島の人たちは、フィリピンのマニラで「打瀬網漁（注17）」を皮切りに造船業などに進出して財を蓄え、故郷に送金したという歴史もある。捕鯨がなくなっても、培ったものが途絶えたわけではなかった。

（注17）打瀬網漁

風力で袋網を引いて魚介類を獲る漁法。海底に棲むエビ、カニ、カレイなどの魚介類を狙う。

（注16）まき網（巾着網）漁業

魚群を囲んで網を張ったあと、網底を締め一網打尽にする漁。生月島では明治時代の終わりごろに始まり、昭和初期以降、動力化した網船で遠方に出漁するようになった。



Story4

今

見られる! 乗れる! 和船MAP

1 佐渡の希少な弁才船「白山丸」

1858年(安政5)に宿根木(しゆくねぎ)で建造された「幸栄丸」を当時の板図(設計図)をもとに復元。1998年(平成10)3月完成。積石数は512石積(約77トン積)。
●佐渡国小木民俗博物館(新潟県佐渡市宿根木270-2) ●開館時間:8:30~17:00(年末年始と12月~2月の月曜は休館)
●入館料:大人500円、中学生以下200円 〇0259-86-2604(佐渡国小木民俗博物館)
<http://www.hakusanmaru.sakura.ne.jp/>



提供:佐渡市教育委員会

2 霞ヶ浦の網漁船「帆引き船」

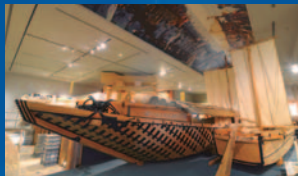
風を利用して網を引っ張る「帆引き漁法」で用いられた。霞ヶ浦沿岸の3市(土浦市、かすみがうら市、行方市)から出航する遊覧見学船に乗って、湖上から眺める。(3市とも日程が異なるので各市の観光協会に要問い合わせ)
〇<http://www.ibarakiguide.jp/seasons/recommend/kasumigaura-hobikisen.html>



提供:行方市

3 琵琶湖の木造船「丸子舟」

江戸時代から昭和30年代まで琵琶湖の湖上で活躍した「丸子舟」を復元展示。
●滋賀県立琵琶湖博物館(滋賀県草津市下物町1091) ●開館時間:9:30-17:00(最終16:30。月曜休) ●入館料:一般750円、高校・大学生400円、小中学生以下無料 〇077-568-4811
<http://www.lbm.go.jp/>



提供:滋賀県立琵琶湖博物館

「和船を見てみたい、乗ってみたい」と思った方に、見学や乗船ができるスポットをご紹介します。和船が行き交うかつての風景が感じられるのでは?

※天候や増水によって中止になること、または料金や時間が変わることもあります。くわしくは各運営元にお問い合わせください

※1~3は「見られる」大型の木造船、4~9は「乗れる」小型の木造船です(人力で動くものに限定)。ご紹介した和船がすべてではありません。ぜひご自身でも探してみてください (2016年10月5日現在)

4 小江戸「とちぎ」でタイムトリップ

栃木市街を流れる巴波川(うずまがわ)を20分ほど遊覧。船頭の歌を聞きながら蔵のまちなみが楽しめる。
●受付場所:蔵の街遊覧船待合処(栃木市倭町2-6) ●運航時間:10:00~16:00(12月~2月は15:00まで。年末年始、荒天時は休み) ●乗船料:大人700円、小学生以下500円、犬100円 〇0282-23-2003(10:00~16:00) / NPO法人 蔵の街遊覧船
<http://www.k-yuransen.com>



提供:NPO法人 蔵の街遊覧船

5 水郷地帯を行く手漕ぎの「ろ舟」

水郷地帯で住民の足となっていた手漕ぎのろ舟(サツパ舟)。前川を約30分遊覧。「あやめまつり」期間中のほか、2016年は4月~10月の週末定期運航を実施(2017年度は未定)。
●乗船場所:水郷潮来あやめ園ろ舟乗り場(茨城県潮来市あやめ前川) ●運航時間:9:00~16:00 ●乗船料:大人1000円、小学生以下500円(乳幼児は無料) 〇0299-80-3831(潮来市商工会)



提供:潮来市

9 急流を木舟で下る「球磨川下り」

日本三大急流の一つである球磨(くま)川で、手漕ぎの木舟による急流下り。ショートコースとミドルコースが人気。
●受付人吉発船場(熊本県人吉市下新町333-1) ●運航時間:9:00~15:00(春夏は16:00まで。要予約) ●乗船料:ショートコース(25分)大人2160円、小学生以下1404円など 〇0966-22-5555(くま川下り株式会社)
<http://www.kumagawa.co.jp/>



提供:くま川下り株式会社

8 復元和船で「姫路城」巡り

姫路藩で利用されていた和船の姿を調査・復元し、内堀で運航。
●受付:姫路城武者溜り(当日9時から受付開始。事前予約不可) ●運航時間:9:30~15:30(2016年は11月27日まで毎週土・日・祝日) ●乗船料:大人1000円、12歳以下500円 〇079-254-5630(姫路藩和船建造委員会)



提供:姫路市

7 森と海のサイクル感じる「天馬船」

アーティストと船大工が出会い、市民も協力して生まれた「天馬船」。舟も漁具も森があってこそ。そのサイクルに思いを馳せる。通常は展示のみ。イベント時に乗船できる(要問い合わせ)。
●展示・活動場所:ひみ漁業交流館魚々座(氷見市中央町7-1) 〇info@himming.jp(アートNPOヒミング)



提供:アートNPOヒミング

6 江戸文化を伝える「櫓漕ぎ」和船

櫓漕ぎ技術の継承を目指して活動する「和船友の会」。水曜日(夏と冬は日曜日)に和船を操船。乗船無料。
●活動場所:江東区横十間川親水公園(東京都江東区海辺8-4先) ●受付時間:10:00~14:15(先着順。10名以上は1週間前までに要予約) 〇03-3647-2538(江東区役所土木部河川公園課工務係)



提供:江東区河川公園課

和船時代の心意気

編集部



そう簡単には
できないこと

ものを運ぶために生まれ、そして発達した和船は人力や風の力で人が動かすもの。人が動けば交流が生まれ、それぞれがもつ多様なバックボーンが混ざり合って新しい何かが生まれる。今回はその何かを「昆布ロード」「陶器」「民謡」「古式捕鯨」の四つに絞り、起源といわれる地域と、伝わったことで変化が生じた地域の双方を取材した。

取材のたびに海を見た。そして和船がからむその土地の歴史と営まれた生活についてたくさんのお話を聞いた。感じたのは「昔の人たちは、今の私たちが思いもつかないような視野とバリエーションをもっていたのではないか」ということ。「板子一枚下は地獄」というほど海の仕事は危険だが、それをものともせず船を駆ってどこへでも行った。その和船時代に比べると、今の方が移動ははるかに速くて楽で安全だ。東京からなら、北海道も沖繩も日帰りできる。全国大会優勝者や師匠が唄う

公演が日に三度行なわれる江差追分会館。訪れた中学生たちに壇上から江差追分を説明し一緒に唄わせていた上席師匠の浅沼和子さんに「江差追分をもっとシンプルな、唄いやすいものにしたくないのはなぜ？」と不躰な質問をした。すると浅沼さんは「簡単ではないですが、長い時間かけて同じ節回しを練習し、息を切らさず一節を歌いきることができたら大きな喜びとなります。つまり自らが生きることとつながっている。それが海を渡って唄い継がれてきた江差追分なのです」と言った。

海と舟に見る 昔と今の時間軸

哀愁漂う節回しの江差追分。馬を引きながら、または船の上で、あるいは一仕事終えた宴の席で、口伝えで長い年月をかけて伝えられたものだ。それを現代風にアレンジしない背景には、積み重ねた時間への敬意があるのではないだろうか。

先日、本誌52号で寄稿していただいた関野吉晴さんとお目に

かかる機会があった。手づくりの船で航海した経験をもつ関野さんに、島から島へと渡り生活圏を広げた太古の人たちと現代の私たちと何が違うのだろうかと思ねた。その答えは「時間の捉え方の違い」だった。

「私の代であの島まで行き、子どもの代でその次の島へ」。そう思っていたのではないでしようか。毎日じつと海を見て『この時期のこういう天気のときは渡れそうだな』と見定められるし、焦っていないのでもいい時期に漕ぎ出せる。私自身は1年で渡ろうとしたけれど3年かかりました。太古の人から見たら、私の計画は少し性急だったのかもしれない」

北前船は沿岸の湊に寄って荷を売り買いしながら旅をした。風が悪ければ何日も滞在した。ずいぶん悠長に思うが、帆船ゆえの「風待ち」の時間が情報交換や遊興といった人の交流をもたらし、江差追分などさまざまな文化の礎となった。翻って現代は、便利になって楽になるはずが、逆に時間に追われているような気がする。

リスクはあっても
チャンスに賭ける

古式捕鯨の網取法は太地が発祥の地とされているが、「鰯や網を扱う技術を太地の人だけですべて編み出したとは考えにくい」と太地町歴史資料室の櫻井敬人さんは話す。

「太地の周辺に技や経験をもった人たちがいて、その人たちの力や知恵を集めて始まったと考えた方が自然です。例えば伊勢湾は鰯の漁が盛んでしたし、太地の北にはイワシを地引網で獲っていた地域もあります」

今、海上輸送は大型や大量なもの運ぶことにほぼ特化しているが、かつて船、そして海はものに加えて情報や技を運ぶネットワークだったのだ。東北と東海をつないだ常滑焼・渥美焼もその産物といっている。鯨網の職人を西海に毎年送り込んでいた田島に「田島の田なし」という言葉がある。平地が少なく米が採れないからだ。それは太地も同様だ。太地と田島の人々は、捕鯨が下火になると海外に活路を見いだす。櫻井さ

んはその心理を「貧しくて食べられないから」ではなく「短期間で大金を手にするためにリスクを負った」と分析している。「たとえリスクがあっても、家族を食べさせるために大きなチャンスがあるのならそれに賭けよう。目の前の海でなくても漁の腕前は活かせるはず——そう考えたのではないでしようか」

富山藩と薩摩藩の、幕府の目を盗んでの昆布と薬種の取引は、公になれば大変な騒動になっただろう。町民を窓口にする、文書は残さないという最低限のリスクヘッジはしていたものの、いつばれるかわからない。そのリスクと引き換えに、両藩は収益を上げ、一方は歴史を変えた。私たちは便利で効率のいい、安全な生活を求めてきたが、「それでいいのか？」と思う人も出てきている。では、どうすればよいか。和船はすでにないが、海を舞台に、リスクはあっても己の腕を信じてしぶとく生き抜いてきた人々の視野の広さと心意気に思いを馳せると、これからは生き抜くための手がかりが見つかるとも思えない。

丸木舟から 帆船まで

丸木舟の時代

3万年前に人類が沖縄に渡ってきた航海の実験について、与那国島から西表島までの75km間、草舟漕ぎが行なわれたと、2016年(平成28)

7月18日の朝日新聞に掲載されていた。当時は丸太を削る斧がなかったと考え、水生植物とツル性植物の草舟の航海実験となったという。

木を伐採する斧が発展すると丸木舟がつくられるようになる。須藤利一編・著『船』(法政大学出版局・1968)に、丸木舟の三形態として、竹筒を縦に二つ割りにしたような割竹形、その前後端を尖らせた鯉節形、鯉節形の前後端を直線的に切った箱形と分類する。丸木舟がその後の船づくりの原型となる。

川崎晃稔著『日本丸木舟の研究』(法政大学出版局・1991)は、南九州、南西諸島をくまなく歩き丸木舟の製作とその儀礼について論ずる。種子島の丸木舟について、原始林に自生する「ヤクタネ五葉松」を用材として、山主から払い下げを受けた



古賀 邦雄 さん
こが くにお

古賀河川図書館長 水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団(現・独立行政法人水資源機構)に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。URL: <http://mymy.jp/koga/>
平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

船主は、伐採する前にお祭りをやる。大木は必ず神が宿っているから、お祭りは神に他の木に移ってもらおう儀式である。おろそかにすると、危険な海の仕事を差し障りが生じる。供物は、米一皿、焼酎燗瓶二本、笹シユエイ(波打ち際のきれいな小石を笹で包み込んだもの)一対である。それから枕木を設置し、伐採、マルキブネの粗形をつくり、舟の底部カワラ、舟の上部ホリヅラを削り、胴部など削り、ほぼアラギリが出来上がると、神に報告し、参加した人でお祝いをする。舟を山から下し、山だし祝いがなされ、仕上げが終わると、縁起のよい日(丑の日)に舟おろしとなる。

丸木舟づくりには、山・川・海の神々に敬意を表する日本の伝統行事が連綿と続く。

出口晶子著『丸木舟』(法政大学出版局・2001)では、丸木舟を海・川・湖から見た列島の歴史動態として捉え、物と人間の間に成立する技のことわりを知るものとして位置づけ、列島各地の丸木舟を踏査する。アイヌのチブ、近世琉球の刳舟、種

子島の櫓を持つ刳舟、美保神社のモロタブネ、中海のソリコブネ、隠岐のトモド、若狭湾以東のドブネ型丸木舟、富山湾のドブネ、越中・神通川のササブネ、越後・荒川のカワフネなどを論ずる。

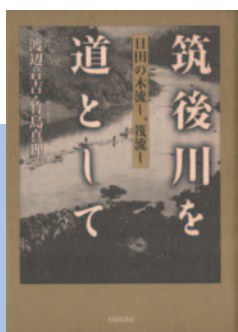
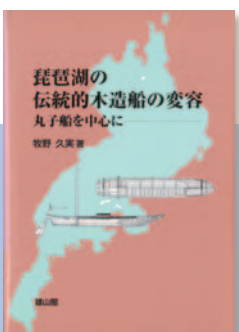
(財)滋賀県文化財保護協会編『丸木舟の時代―びわ湖と古代人』(サンライズ出版・2007)は、昭和39年近江八幡市水葦内湖から発見された縄文時代の丸木舟を通して、琵琶湖と古代人とのかわり方を考える。縄文時代は移動生活から内陸部での定住生活へ変わり、沿岸部の食料資源を確保するために丸木舟を活用することになる。1988年(昭和63)1月、大阪市長原高廻り2号墳で船形埴輪が発見された。この古代船を復元、8人漕ぎで釜山まで就航した。このプロセスを大阪市教育委員会編・発行『よみがえる古代船と5世紀の大坂』(1989)に著す。

現在では、筏流しは陸送にとつて

代わり、河川を利用することはほとんどなくなった。その筏流しの再現をはかり、写真で著した古田雅久撮影・編『木の旅長良川』(古川茂樹・2000)がある。岐阜県は「飛山濃水」と言われ、飛驒の秀れた山、美濃の清水と讃えられてきた。全長約150kmの長良川はその流域民に多くの恵みを与えてきた。その一つは木材という資源である。筏流しは、まず山小屋づくりから始まり、杉・桧等を伐採、小さい谷を利用してV字型に組み「修羅」をつくり、木出しをする方法である。修羅から川へ落とし、川堰をつくり、木馬での運搬、そして筏を組み、筏流しとなる。

木曾川の筏流しは名古屋城の築造、城下町の建設に欠かせなかった。(財)長野営林局作業課編『木曾式伐木運材図絵』(財)長野営林局互助会・1954)、(財)林野弘済会長野支部編・発行『木曾式伐木運材図会』(1975)の2書は、江戸期における川狩り、筏流しを日本画で描く。同様に、富田礼彦著『飛驒運材図会』(住

伊書店・1917、復刻版岐阜県郷土資



料刊行会から1970年に刊行)は、天領飛騨の河川の利用を伴う官材運搬を描写する。益田川から飛騨川と木曾川を利用して、尾張白鳥湊へ出される。吉野川については、辻隆道著『吉野川流域の伐出技術』(西徹・1995)、筑後川については、渡辺音吉／語り・竹島真理／聞き書き『筑後川を道として 日田の木流し、筏流し』(不知火書房・2007)がある。

琵琶湖の船

琵琶湖は、面積670・25km²を有する日本最大の湖である。古代から水運が発達し、さまざまな船が行き交った。日本海の物資が陸路で琵琶湖へ運び込まれ、京へ向かった。谷口嘉六・宮部義男共著『日本海と大阪湾とを結ぶ水運の聯絡』(寶文館・1935)に論じられているように、琵琶湖運河計画がなされた。織田信長は安土城を築き、琵琶湖の水運を図るために大型船を建造した。用田政晴著『信長 船づくりの誤算』(サンライズ出版・1999)では、1573(元亀4)年、大船建造後すぐに早船に解体したという。信長は大船が琵琶湖では役に立たないと悟ったからである。琵琶湖の独自形態として発達した丸子船は、帆を付け、舳先は板を立て並べた構造で舷側には丸太を半裁し、取り付けた船である。江戸期には琵琶湖舟運の主役となる。

丸子船については、橋本鉄男著・用田政晴編『丸子船物語』(サンライズ印刷出版部・1997)、牧野久実著『琵琶湖の伝統的木造船の変容―丸子船を中心に―』(雄山閣・2008)がある。西廻り航路開通により琵琶湖の物資輸送は低下する。さらに明治期東海道線の開通に伴い貨客輸送が打撃を受け、それに代わって、観光遊覧船の航行となった。琵琶湖の船については、大津市歴史博物館編・発行『琵琶湖の船―丸木舟から蒸気船へ―』(1993)、滋賀県立安土城考古博物館・長浜市長浜城歴史博物館編・発行『琵琶湖の船が結ぶ絆―丸木船・丸子船から―うみのこ―まで』(2012)、杉江進著『近世琵琶湖水運の研究』(思文閣出版・2011)がある。

和船・弁才船

石井謙治著『和船I』(法政大学出版局・1995)は、江戸期から明治にかけての国内海運に重要な役割を担った大型木造船弁才船を論ずる。海運・造船の中心地であった大阪と瀬戸内の船匠たちが、弁才船の積石数2500石だったのを1000石と大型化して発展する。長い船首材を突き出した鋭角的な一本水押形式の船首、反り上がった船首尾と全体的に直線的要素の多い船体形状、格子状に組まれた舷側の垣立、そして1枚の大きな帆で受ける風が唯一の動力であり、船の中央に大きな帆柱1本を備えるのが弁才船の特徴である。

筵帆から白帆すなわち木綿帆に代わったこと、さらに航海・帆走の両技術の進歩に伴い乗組員の減少と航海日数の短縮化が図られた。海難と信仰の項では船魂信仰、船絵馬奉納、住吉神社信仰も論ずる。

同著『和船II』(法政大学出版局・1995)は、造船史から見た著名な船として、秀吉の日本丸、巨艦安宅丸、水戸光圀の快風丸、紀伊国屋文左衛門の蜜柑船、三浦接針の洋式船、伊達政宗の遣欧使節船、中浜万次郎と越進船などを捉えている。神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民俗32特集『和船』』(平凡社・2016)の、昆政明氏「船絵馬に見る弁才船の帆走」では、船絵馬に描かれた弁才船の船体は横位置、帆走は横風帆走がほとんどであったと分析する。日本海を帆走する弁才船の雄姿は美しい。

帆船讃歌

近代的な帆船も美しい。その帆走は乗組員の絶え間ない厳しい訓練によって培われている。横浜みなと博物館に保存・展示されている日本丸は、1930年(昭和5)建造された練習帆船である。定員138名、総トン数2278トン、全長97m、幅13m、平均喫水5・3m、総帆数29枚、最高マストの高さ水面から46mを誇る。大杉勇著『帆船讃歌―雲と波そして風 海に学ぶ―』(成山堂書店・2016)は、練習船日本丸船長の著者が、実際に航海訓練について

述べている。1959年(昭和34)太平洋上で初期帆走訓練航海中伊勢湾台風と闘ったこともあった。航海を終えると実習生はたくましく成長する。中村庸夫著『帆船』(朝日ソノラマ・1976)は、世界の帆船を写真で紹介し、クリッパー・レース、練習帆船の建造、帆船レース、日本丸・海王丸の装帆図と一般配置平面図を載せ、帆船の魅力を論ずる。

おわりに、児童書2冊を掲げる。柳原良平著『絵巻えほん 船』(こぐま社・1990)は、帆船発達と大航海時代から華やかな客船の時代の世界の船を描いている。ヒサクニヒコ絵／文『人類の歴史を作った船の本』(子どもの未来社・2016)は、海でつながった縄文時代、ヨーロッパで発達した大型の帆船、蒸気船の誕生、地中海とヨーロッパの船、帆船の時代、ペリー来航と開国、第二次世界大戦と船について、丁寧に描く。有史以来、草舟、丸木舟、筏から豪華客船まで船の変遷をたどり、人類の発展には、船の進化があったと位置づける。以上、いくつかの書を挙げたが、船は、山と川と湖と海をつなぎ、広々とした世界を魅了させてくれる。

さて、これからの草舟の航海実験が、3万年前に人類が沖繩に渡ってきたことを解明できるだろうか。時空を超えた大いなるロマンを感じざるを得ない。

〈花筏本流に出て解散す〉
(塩川雄三)



伏流水と「もったいない精神」が生んだ 六田麩

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は、ふっくらもちもちとした食感が特徴の「六田麩^{ろくだふ}」です。江戸時代に宿場町として栄えた六田地区では、大切な宿客を自慢の麩料理でもてなし大変喜ばれたそうです。いまや麩料理は、六田の家庭の食卓の強い味方。「もったいない精神」が育んだというルーツを訪ねました。



特徴はこの分厚さと食感。煮崩れしにくいので、家庭でも重宝されている

水の恩恵を受けた宿場町

奥羽山脈の西山麓、村山平野に位置する山形県東根市。市の西部にある六田地区では、江戸時代から麩づくりが盛んに行なわれてきた。グルテン（注1）を主原料とする麩には、豊富な水と小麦粉が欠かせない。

東根市一带は奥羽山脈を源とする白水川、野川、乱川という3本の川がつくり出した扇状地で、この地形が生み出す伏流水が六田周辺で湧出していた。また、古くから紅花や葉煙草の主産地であった六田では、これらの連作障害（注2）を防ぐ方法として小麦を植えたという。

羽州街道が通る六田は交通の要所として栄え、江戸時代には六田宿として賑わった。享和年間（1801～1804）に上方よりやってきた職人が麩の製造に欠かせない「水」と「小麦」が六田にあることを知り、その技術を伝えたことが「六田麩」の起源とされる。

肉や魚に代わる万能の麩

六田麩は、長い木の棒に巻きつけて焼き上げる独特な形の焼麩だ。グルテンの含有量が一般的な麩の3倍ほど多く、もっちり肉厚で、噛むと

（注2）連作障害

同じ土地で同じ作物を繰り返してくりつけると起きる生育不良、収量減などを指す。

（注1）グルテン

水で練った小麦粉に含まれるたんぱく質の一種。小麦加工品をつくるうえで弾性を決める重要な要素となる。



①強力粉に六田の伏流水を加えて練ったもの ②さらに練って何度も水で洗い流すとグルテンができる ③グルテンに小麦粉を混ぜたものを1本分の量に切り分ける。六田ではほんの少ししか小麦粉を混ぜない ④熟練した職人がグルテンをのびしながら棒に巻きつけていく ⑤10～15分ほどかけて1本ずつ焼いていく ⑥棒から抜き取った麩を一晚乾燥させて完成

食文化を守るために

現在操業する4軒の麩屋のうちの1軒が、1860年(万延元)創業の「文四郎麩」だ。文四郎では1日に2000本の麩を製造し、販売店や

弾力がある。食べごたえもあり、肉や魚と同等のたんぱく源にもなる。「麩づくりは重労働でした」と話すのは、観光ボランティアガイド「果樹王国ひがしね案内人の会」会長の太田浩雅さんだ。太田さんの実家は1862年(文久2)創業の麩屋だったが、5年前に廃業した。昔は毎朝3時に起きグルテンをつくったという。

かつて麩は肉や魚などの保存がきかない夏場に食べることが多かった。しかし、1950年代後半に冷蔵庫が普及すると徐々に衰退。最盛期は六田に10軒ほどあった麩屋も4軒となった。しかし今も、どの家庭の冷蔵庫庫脇にも棒状の麩がぶら下がっているほど、麩料理は食卓の定番だ。「手軽で煮くずれにくいので、みそ汁や煮物、鍋物の具として一年中食べます。野菜が不作のときも代わりに麩を食べるんです」と太田さん。東根では芋煮に必ず麩が入り、学校給食にも麩の献立がある。

市内の学校に卸す。「グルテンをつくる際は強力粉と水を練り合わせたものに水を加え、約3時間かけてデンプンを洗い流します。この工程に大量の水が必要なのです」と説明するのは、六代目・齋藤文四郎さんとともに店を切り盛りする息子の幸信さんだ。

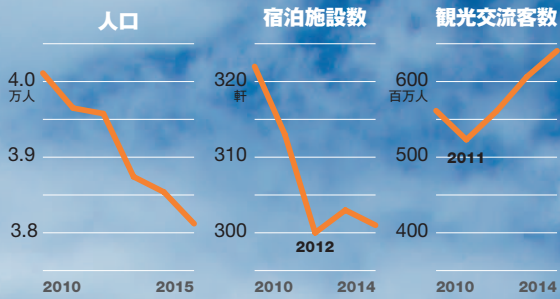
六田麩にグルテンが多い理由は、貧しかった山形藩ならではの「もったいない精神」だと六代目は言う。節約するために少量の小麦粉でつくったところ、焼くのは難しいけれどグルテンが多い肉厚な麩が完成した。その精神は今も生きており、洗い流したデンプンは捨てることなく、久寿餅(注3)の原料として関東などへ出荷している。

六代目は六田麩をPRしたいと、麩のメニュー開発に余念がない。麩かりんとうや麩ドーナツなどのお菓子のほか「麩の唐揚げ」も考案した。「先人がもたらした六田麩の可能性を発信することで、全国の人に食べていただきたい。それが自然の恩恵を受けて商いしてきた私たちが地域にできる恩返しです」と六代目。地域で大切に受け継がれる六田の麩を、ぜひ一度味わってほしい。(2016年9月2日取材)

1「文四郎麩」の敷地内にある井戸。伏流水が湧き出している 2果樹王国ひがしね案内人の会 会長の太田浩雅さん 3文四郎麩の六代目・齋藤文四郎さん 4六代目とともに伝統の麩の製造に取り組む齋藤幸信さん 5文四郎麩が経営する麩料理処「清居(せいご)」の一品「煮物」(焼き麩と季節の野菜)。これ以外にも造りやあんかけなどさまざまなアレンジされた麩の懐石料理が味わえる

(注3) 久寿餅

原料は小麦粉からグルテンを分離させた後の浮き粉で、主に関東地方で食べられている。「葛餅」の原料は葛粉。



熱海市『熱海の観光 平成 27 年』より

温泉観光地 バージョンアップのしくみ

静岡県熱海市

人口減少期の地域政策を研究し、自治体や観光協会などに提案している多摩大学教授の中庭光彦さんが「おもしろそうだ」と思う土地を巡る連載です。将来を見据えて、若手による「活きのいい活動」と「地域の魅力づくりの今」を切り取りながら、地域ブランディングの構造を解き明かしていきます。その土地ならではの魅力や思いがけない文化資産、そして思わぬ形で姿を現す現代の水文化・生活文化にご注目ください。今回は、静岡県東部の相模湾に面し、古くから温泉保養地・観光地として知られている「熱海」です。

中庭 光彦 さん
なかにわ みつひこ

多摩大学経営情報学部事業構想学科教授

1962年東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科博士課程退学。専門は地域政策・観光まちづくり。郊外や地方の開発政策史研究を続け、人口減少期における地域経営・サービス産業政策の提案を行なっている。並行して1998年よりミツカン水の文化センターの活動にかかわり、2014年よりアドバイザー。主な著書に『オーラルヒストリー・多摩ニュータウン』（中央大学出版部 2010）、『NPOの底力』（水曜社 2004）ほか。



海水浴客で賑わう熱海の「サンビーチ」。外国の高級リゾートに似た雰囲気、テレビ番組のロケでもよく取り上げられる

なぜ熱海は元気なのか

熱海の集客力が注目を浴びている。熱海駅から熱海銀座に延びるアーケードは若い男女グループやシニアグループ、インパウンド客で賑わっている。

観光客は2014年度（平成26）で約64.8万人にのぼる。宿泊施設数の減少も下げ止まり、おおよそ300の施設が営業している。人口3万8000人の熱海市がこれだけの交流人口を集めている。

熱海といえば1960年代は「100万ドルの夜景」といわれ、マストリーズムの象徴的な温泉地だった。ところがバブル崩壊後、過剰投資した大型宿泊施設は次々と閉店した。熱海の砂浜から海岸沿いを見ると、以前はホテルがずらりと並んでいたが、今はむしろマンションが目立つ。東京へ通勤できる便利なリゾート地となっている感がある。

かつて賑わっていた熱海をイメージして温泉観光地として見ると、縮小して下げ止まったと見えるかもしれない。しかし、1980年代後半に生まれ、そのような熱海、そして当時の日本を知らない現在30歳よりも下の若年層にしてみれば、「個人向

け滞在地」として新たな魅力が感じられるのではないか。

温泉地としての熱海の特徴

温泉地にはいくつかの類型がある。かつて本誌22号でも取り上げた野沢温泉のように温泉権を地縁法人が総有し管理しているケースや、熊本県の黒川温泉のように、各温泉施設が入湯手形を取売し、観光客はそれぞれあれば何回でも他の施設の温泉に入れるというケースもある。どちらも温泉権を地域みんなで守っていくためのしくみといえる。

熱海はどうかというと、大湯と呼ばれる泉源を中心に、大正時代までは、宿が集まっていた。ところが1923年（大正12）の関東大震災後、大湯からの湧出は激減し、その後、各宿は自ら温泉を掘削した結果、熱海は大温泉都市として発展した。そして温泉権は株券のように譲渡されることもあり、温泉権の古典的な研究『温泉権の研究』（勁草書房 1964）では自由な取引ができる熱海は「もっとも近代的な権利関係である」と書かれた。

その分、宿同士の競争は激しく、



団体旅行も多かったことから大型化し、温泉地全体で温泉資源を守るという気持ちはもちにくかった地域とも言える。

バブル崩壊後は宿の経営権や運営権が他の企業に移転されたり、地価が下落して買い手もつかないような不動産が生まれた。通常なら、それが長引いたままシャッター通り商店街のように寂れてしまうことも少なくない。全国の中心市街地問題と同様の構図がここにもある。

ところが、熱海は違うようだ。HPを見ても、まち全体を変えようと

いう若手の気運が伝わってくるのだ。

空き物件を活かした リノベーションまちづくり

かつて賑わいながらも2005年ごろは買い物客も減っていた目抜き通りが熱海銀座である。

ここに2015年9月、ゲストハウス「マルヤ」を立ち上げたのが株式会社 machimori だ。代表の市来一郎さんは熱海の保養所管理をしていた家で生まれた。東京の大学で学びビジネス経験を積んだあと、

熱海でまち歩きや観光資源を掘り起こすまちづくりを行なってきた。

ゲストハウスというのは長期宿泊者向けの安い宿で、コモンスペースもっている。ここに泊まると自炊もできるが、近くのレストランで食べることになるのでまちにも出て行く。コモンスペースでは地元の人たちや旅仲間と交流ができる。このような特徴をもったゲストハウスが、全国で増えている。

マルヤのもう一つの側面は、使われていなかった不動産をリノベーションしてつくったという点だ。元は

パチンコ屋だった場所を、所有者が一定の利益を得られるように

machimori が事業設計し、所有者もまちのためになる施設になるという理由から利用を認めた施設だった。このように所有権と利用権を切り離し、利用面で新しい収益事業を行ないながらまちの空間と能力のある人を誘導していく方法をエリアマネジメントという。マルヤが人を集めていることで、この事業が目ざされているのである。

machimori の活動の契機は2013年(平成25)から開催しているリノベーションスクールだ。熱海、和歌山、浜松でも開いたこの試みに多くのクリエイターたちが集まった。空き不動産に新たなビジネスアイデアをつくるワークショップだったが、なにせ土地のオーナーの人生がかかっている。外からの参加者が真剣になってつくった計画の結果が実を結んでいる。

現在、市来さんの頭のなかには、熱海の住宅問題もある。空き家はあがるが、借り手の条件に合った物件が熱海には少ない。これもリノベーション、エリアマネジメントの課題として取り組んでいるところだ。



株式会社 machimori と NPO 法人 atamista を率いる市来一郎さん。「100年後も豊かな暮らしができる熱海(まち)をつくる」を目標に掲げ、多角的に事業を進める市民プロデューサー



市内の目抜き通り「熱海銀座商店街」。熱海駅から歩いて10分少々で着く。市来さんたちの事業はここを核に進められている



- 1 ゲストハウス「マルヤ」は熱海銀座の真ん中にある。ビーチにも近いし、飲食店も多い。「安く泊まって、その分まちなかを楽しみたい」という若い世代に人気がある。1Fはカフェ・バーも併設。伊豆のクラフトビールなどが楽しめる
- 2 マルヤの1Fの共有スペースにある自炊客用のキッチン。スタッフとも気軽に話せる空間になっていて、バックパッカーだった市来さんのアイデアが各所に盛り込まれている
- 3 1室ずつすべて内装が違うマルヤのシングルカプセル（1人部屋）。一泊4000円程度で泊まることができる
- 4 マルヤの斜め前にあるカフェ「CAFÉ RoCA」。3年間空き店舗だった空間をカフェへとリノベーションした。店内と道路の境目を感じさせないオープンな雰囲気のほか、地元の産品を用いたヘルシーな食事を提供する
- 5 佐藤さん所有のビルの2Fにあるコワーキングスペース&シェアオフィス「naedoco」。佐藤さんの協力を得て、machimoriが運営。ミーティングやイベントもできる多目的なスペースだ

熱海銀座の歴史と 観光地小売業の変容

この machimori に建物を貸しているオーナーの一人に、佐藤油店を営業している佐藤秀幸さんがいる。熱海で生まれ、祖父が熱海銀座で始めた椿油店を今も営んでいる。

かつて椿油といえは化粧品として高値で売られ、祖父は、熱海で観光商品として椿油を搾油・販売していたという。椿油は五島列島が産地として有名だが、熱海はやはり椿で有

名な伊豆大島を後背地としており、ここで販売することが有利と考えたらしい。

昭和30年代〜50年代の熱海銀座の観光客の賑わいはすごかったと、当時ここで生まれた佐藤さんは語る。

それに合わせて、父の代には椿油屋から土産物屋になったが、自分が店を継いだときには観光客も減少し、このまま土産物屋を続けるわけにもいかなかった。そのとき、元の椿油屋に戻し、製造と小売りの両方を行なっている。現在付加価値が高いの

が食用の椿油だと言う。

佐藤油店の外観。2Fには「naedoco」があり、1F奥にはアパレルデザイナーたちが最近入居した工房もある。クリエイティブな人が熱海に集まりつつある

サトウ椿株式会社代表取締役の佐藤秀幸さん。佐藤油店を運営しつつ、物件を提供して若い世代のまちおこしにも手を出している



こうして佐藤油店は100年近く続いているのだが、その続き方は興味深い。老舗というと、一つの商品売りつけづけてきた伝統店を思い浮かべるが、同一商品だけで継続するのは難しい。観光地で土産物屋として椿油を始め、土産物にシフトし、今は食用椿油というように「土産物×椿油」という芯はぶれないようにしつつ、業容・業態を変え顧客に適応してきたという、観光地小売業の継承方法もあるのだ。

若者を惹きつける 神社のスイーツカフェ

来宮神社きのみやが賑わっている。参詣者の7割が若い人、しかもその7割は女性だという。参道・境内の写真スポットにはスマホを置く台が設置され、カップルが仲よく写真を撮っている。境内に入るとご神木の太楠。

その前に参詣殿があるのだが、社務所の脇にはしゃれたスイーツカフェ「茶寮『報鼓』」があり、長く佇みたくなる。

神社は山とまちの境界にある。神社がもっていたコミュニティの形成機能は大事なものの、それを維持したかったと、宮司の雨宮盛克あめのみやもりかつさんはおっしゃる。

雨宮さんは、神社を改修する折、まず参詣者目線で、変えられる機能・形態は何か点検をしたという。ご神体とその参詣殿は変えられないが、その他についてはかなり変えられることに気がついたという。

スイーツカフェについても、雨宮さんにとっては「神人共食の場」で、コミュニティをつくる場ということになる。

このしくみが新しいのは、スイーツカフェに置かれているのが熱海市



来宮神社の境内にあるスイーツカフェ「茶寮『報鼓』」。平日の午前中にもかかわらず、参拝を終えた人たちが賑わっていた



「茶寮『報鼓』」で提供する麦こがしアイスを用いた「アイス珈琲フロート」と「麦こがしシフォンケーキ」



「来福認定」の札。来宮神社の神様の好物とされる「麦こがし」、本州一位のご神木「大楠」などをイメージした食べものを提供する加盟店に掲げられている

もともと地域のコミュニティだった神社を「世代を越えた『縁結び』の場にしたい」と前例にとらわれない試みを行なう来宮神社の宮司、雨宮盛克さん

内の店でつくっている選りすぐりのお菓子。そしてその販売店舗マップも置かれており、店に行きマップを見せると割引がある。店には「来福認定」という札が掲げられており、いわば来宮神社ブランドだ。神社参詣者をまちに回遊させる役割を意識してつくったところがいい。

雨宮さんからご説明いただいた神社空間のリニューアル手法は、全国の伝統的空間にも応用可能だが、これも氏子さんやまちの人々に日ごろから神社が支えられている伝統があらってのことだろう。

老舗温泉旅館と観光地を丸ごと守る

熱海でもっとも古い旅館である古屋旅館社長の内田宗一郎さんは、熱海の同時代史をこう語る。

「1980年代から90年代初めは、何をしなくても団体客や個人客が来ました。ニーズに応じていたわけです。リーマンショック前の2003年ごろには『安近短ブーム』があり、熱海が行きやすいと人気が出、古屋旅館も2005年には個人向け露天風呂をつくっています。そして2008年がリーマンショックの年になります。2007年〜2009年は全国的に観光需要が冷え込んでいました。2012年には熱海市が『ADさん、いらっしやい!』キャンペーンを行ないました。市内で行なわれる撮影ロケを無料でサポートするものです。これが当たり前し、テレビで

の露出は10倍ぐらいいなりました。そして、最近若い人が来てくれて、人が集まることで熱海への投資が加速しています。ただしリピートしていただくためには驚きやまちとしての魅力が必要です。

今、商工組合を引っ張っているのは私たちの世代で、年上でも50代。10年ほどの旅館経営経験があり、両親から信頼され、数百万円の投資なら自分で意思決定できる。そんな世代が集まっています」

熱海への集客ニーズとサービス提供のタイミングがチャンスにもリスクにもなる観光ビジネスの厳しさ。だからこそ世代が協力してまちをつくるのが大事という誇り。この二つの関係について考えさせられる話だった。

世代交代によるバージョンアップ

今回熱海で四者四様の経験をうかがうと、一つのキーワードが思い浮かぶ。それは、世代交代による地元ネットワークのバージョンアップだ。熱海を温泉観光地から個人向け滞在地にバージョンアップさせているのは、主に40歳代を中心にした仕



古屋旅館のシンボルである武田屋形門。映画の撮影で用いられたこともある

事を異にする人々のネットワークだった。

観光地では、いくら一企業ががんばっても全体の集客力が伴わなければ限界がある。そこにみんなで協力する動機という文化が生まれてくる。個人向け滞在地という新しい「産地形成」に向けた地元企業家の力で、熱海は次のステージで活動しはじめている。

〈魅力づくりの教え〉

異なる業種・業容の地元企業家が、自分の仕事をバージョンアップする。その企業家世代が重なっていると、まちの魅力づくりが加速する。

(2016年8月23〜24日取材)

参考文献

川島武宜、潮見俊隆、渡辺洋三編著「温泉権の研究」(勁草書房 1964)
「熱海歴史年表」(熱海市 1997)

創業1806年(文化3)という熱海温泉最古の旅館「古屋旅館」の代表取締役、内田宗一郎さん。商工会議所や観光協会でも要職を務める

坂本クンと行く川巡り 第11回 Go! Go! 109水系

神話とたたたら

出雲の民の暮らしを支えた斐伊川 (鳥根県)



坂本 貴啓 さん
さかもと たかあき

筑波大学大学院 システム情報工学研究科
博士後期課程 構造エネルギー工学専攻 在学中

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ちはじめ、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代にはJOC（Joint of College）を設立。白川直樹研究室「川と人」ゼミ所属。河川市民団体の活動が河川環境改善に対する潜在力をどの程度持っているかについて研究中。

川系男子坂本貴啓さんの案内で、編集部の方々が全国の一級河川「109水系」を巡り、川と人とのかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。今回の原稿は、博士論文の執筆に奮闘中の坂本くんに代わって、編集部がまとめました。

ヤマタノオロチ伝説が残る「神話の川」

「鳥根県の斐伊川に行きませんか？」と坂本くんは言いました。斐伊川とは、鳥根県と鳥取県の県境にある船通山に源を発し、汽水湖である宍道湖と中海を経て日本海に注ぐ長さ153kmの一級河川です。

かつて、斐伊川の上流域では山を削って砂鉄を採る「鉄穴流し」が行なわれたため、その大量の土砂が流れ込んで下流域に堆積し、洪水が頻繁に起きました。江戸時代初期には土砂で埋まったうえ洪水が起き、西から東へと流路を変えます。「そこで人為的に河道を切り替える『川違え』と呼ばれる工事が繰り返



109水系

1964年（昭和39）に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」（河川法第4条第1項）を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

【斐伊川流域の地図】

国土交通省国土数値情報「河川データ（平成20年）、流域界データ（昭和52年）、ダムデータ（平成26年）、鉄道データ（平成27年）」より編集部で作図

川名の由来【斐伊川】

斐伊は火で鉦（たたら）にかかわる語。流域は鉦、鉄穴流しが盛んに行なわれていた。船通山を源に、斐伊郷（和名抄[平安時代]の呼び名）を経て宍道湖に注ぐ。



上：荒神谷博物館の館長、藤岡大拙さんはNPO法人 出雲学研究所理事長などさまざまな公職を兼任する「出雲の語り部」
左：木次町と吉田町の境にある「天が淵」。ヤマタノオロチが住んでいたといわれる

し行なわれ、洪水を防ぐと同時に新田も開発して今の出雲平野ができたのです」と坂本くん。今回は「ヤマタノオロチ伝説」が残る神話の川であり、「たたら製鉄」も盛んだった斐伊川を巡りました。

「実体のない神話の国」を覆した大量の銅剣

島根県といえは近年パワースポットとして出雲大社が人気です。「出雲」とは島根県の東側を指します。

『古事記』や『日本書紀』(注1)には、スサノオノミコトやオオクニヌシノミコトなど出雲系の神々、そして出雲を舞台とした神話が数多く登場します。また、同時期に編纂された風土記(注2)のなかでも完本に近い形で残る『出雲国風土記』には、出雲の神々が活躍する様子が記されているため、出雲は「神話の国」とも呼ばれています。

坂本くんと編集部はまず「荒神谷遺跡」を訪れました。ここは、1984年(昭和59)7月に日本の古代史を揺るがす大発見があった場所。遺跡に隣接する荒神谷博物館の館長、藤岡大拙さんによると、広域農道建設の調査で須恵器の欠片が見つかったため付近を発掘したところ、358本もの銅剣が出土しました。

「当時、銅剣は全国でも300本ほどしか見つかっていませんでした。それを上回る驚異的な数の銅剣が1カ所で発見されたのです」

トップニュースとなったこの発見を「出雲の存在感を変えた」と藤岡さんは見えています。「出雲は『神話の国』といわれていましたが、小規模な古墳しかない『実体のない神話の国』でした。ところが弥生時代中期の銅剣が大量に出土したことで『実

体のある神話の国』となったのです」

しかも、翌年には銅剣のすぐそばから銅鐸6個と銅矛16本が出土。その後も加茂岩倉遺跡(注3)など、弥生時代の遺跡が多数発見されます。「大陸と近い出雲は、交易によって当時の日本の先進地だったと考えられます」と藤岡さん。

荒神谷遺跡と斐伊川の関係に目を転じると、『古事記』『日本書紀』『出雲国風土記』それぞれに、マコモやアシと考えられる水生植物「菱」と川が登場する神話があるそうです。いずれも二人の神が主人公で、菱のある川へ水浴びに誘った側が先に川から陸に上がり、相手の刀を模造刀(木刀)にすり替えておいて切り殺すという酷似したストーリーです。

「つまり銅剣が大量に出土した荒神谷には有力な豪族が住んでいて、川に斐伊川を舞台に覇権を争っていた……とも想像できるのです」。藤岡さんはいたずらっぽく笑いました。

神秘に満ちたオロチ伝説

斐伊川流域には、スサノオノミコトがヤマタノオロチ(オロチ)を退治した神話があります(別項参照)。藤岡さんによると、斐伊川こそオロチ

斐伊川

水系番号	: 72	
都道府県	: 島根県・鳥取県	
源流	: 船通山 (1142 m)	
河口	: 日本海	
本川流路延長	: 153 km	19位 / 109
支川数	: 227 河川	16位 / 109
流域面積	: 2070 km ²	30位 / 109
流域耕地面積率	: 11.4 %	44位 / 109
流域年平均降水量	: 2006.10 mm	50位 / 109
基本高水流量	: 5100 m ³ /s	62位 / 109
河口の基本高水流量	: 1万 1588 m ³ /s	28位 / 109
流域内人口	: 50万 3973人	30位 / 109
流域人口密度	: 198人 / km ²	43位 / 109

(基本高水流量観測地点: 大津(河口から12.5km地点))
河口換算の基本高水流量 = 流域面積×比流量(基本高水流量÷基準点の集水面積)
データ出典: 『河川便覧 2002』(国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面)

参考文献 『神々と歩く出雲神話』(NPO法人出雲学研究所)、『出雲 古事記のふるさとを旅する』(平凡社)、『鉄のまほろば〜山陰たたら里を訪ねて』(山陰中央新報社)、『斐伊川百科 フィールドで学ぶ』(今井書店)、『中海宍道湖の科学——水理・水質・生態系——』(ハーベスト出版)

コラム1 日本で3カ所しかない鮭神社

坂本貴啓

日本には鮭を祀った神社が各地にあります。鮭神社と名の付く神社は島根県雲南市、福岡県嘉麻市(本連載の第1回「遠賀川」でも紹介)、北海道広尾町(福岡県から1983年「昭和58」に分社)の3カ所だけといわれています。この地域の人たちは「鮭大明神」として鮭を祀り、神の使いであると考えられています。すでに鮭は食べません。

斐伊川と遠賀川の鮭神社は2010年(平成22)までは互いの存在を知らなかったそうですが、現在は氏子さんたちが行き来するという交流が始まりました。



雲南市大東町にある「鮭神社」



右：地元の子どもたちが砂鉄採りをする場所と聞いて川に入った坂本くん。持参した磁石で砂鉄を集めていた 左：奥出雲町を流れる斐伊川（上流域）。奥には斐伊川の源である船通山（せんつうざん）の頂も見える

上：「国譲り神話」の舞台である稲佐の浜で、夕刻に神楽を舞う深野神楽保存会の皆さん 提供：深野神楽保存会
右：「1846年（弘化3）の神能記（しんのうき）が残されているので、深野神楽はかなり古い時代から舞われていたはず」と言う深野神楽保存会の事務局、小田和子さん

切ったとき、尾から一本の剣が出てくることも、製鉄部族説の根拠となつています。江戸期に鉄づくりを進めた鉄師たちとは関係のない話ですが」と藤岡さん。

オロチをはじめとする神楽を舞う団体が、流域にはいくつもあります。その一つ、雲南市吉田町深野地区の深野神楽保存会は、大正時代にいったん途絶えてしまった神楽を見事に復活させました。深野地区は、オロチが潜んでいたとされる斐伊川の

であるとの説が根強いそうです。毎年やってくるのは洪水で、娘を食べるのは農民を困らせるため。頭が八つ、尾が八つあるのは、支流や氾濫した川筋の比喻とも考えられます。斐伊川流域の約50カ所にオロチ退治にまつわる伝承が残っています。

ただし藤岡さんは「オロチ＝製鉄部族説」という異説を明かします。「オロチはコシノヤマトノオロチとも記されていますが、コシとは越前や越後のこと。しかし川が移動するわけではない。古代に鉄をつくっていた人たちと考えると、彼らは良材（砂鉄と木炭）を求めて移動していて食料が必要。だから実りの秋になると農民を襲って米や娘を奪う。スサノオノミコトがオロチの尻尾を刀で

約1400年前から、粘土の炉のなかに砂鉄と木炭を入れ、火を加減して鉄をつくる「たたら製鉄」（たたら）がありました。『出雲国風土記』にも鉄の生産が記されています。

奥出雲たたらと刀剣館の尾方豊さんは「中国山地には風化した花崗岩が広く分布していて、特に出雲南部の奥出雲では良質な砂鉄が採れました。広大な森林からは木炭も得られるのでたたらが盛ん。江戸後期から明治期は全国の約4割の鉄がつくれる国内屈指の生産地でした」と教

「天が淵」のすぐそば。隣接する木次町の斐伊川河川敷、2010年からは尾原ダムで「斐伊川かがり火舞」を舞っていました。今年是他地域から神楽団を招き、「復活30周年記念共演会」を開催しました。

事務局を務める小田和子さんは「伝承活動として始めた『深野神楽こども教室』の卒業生が保存会に入団して活躍しているんですよ」とうれしそうに話してくれました。

農鋳一体の産業だった「たたら製鉄」

「25年後、松江藩は『秋から春までに限る』土砂を取り除くこと」といった制限付きで鉄穴流しの再開を認めました」と尾方さん。当時、鉄は希少でしたから、松江藩は財政再建を目指し、1726年（享保11）に「鉄方御法式」をしき、有力鉄師9

「たたら製鉄」の卒業生が保存会に入団して活躍しているんですよ」とうれしそうに話してくれました。

とはいえ、最初からうまく事が運んだわけではありません。室町時代末期に効率よく砂鉄を採る方法として編み出された鉄穴流しは、山を切り崩し、その土砂を水路に流して純度の高い砂鉄を得るものですが、下流に流された土砂が堆積して河床が上がり洪水の原因となるほか、斐伊川の水が汚れるので鉄づくりを行なう鉄師と農民に軋轢が生じます。松江藩も宍道湖への土砂堆積などを懸念して1610年（慶長15）に鉄穴流しを一度禁止します。

（注4）有力鉄師9人

奥出雲町＝紅（ゆずりは）家、卜蔵（ぼくら）家、絲原（いとはら）家、櫻井家、山根家。雲南市＝田部（たなべ）家、田部家（分家）、石原家。出雲市＝田儀（たぎ）櫻井家

（注3）加茂岩倉遺跡

荒神谷遺跡から直線距離で約3kmのところにある。1カ所からの銅鐸の出土としては全国最多となる39個が発見された。

（注2）風土記

『古事記』や『日本書紀』と同時期の報告書。朝廷が命じて各地方の文化風土や地勢を国ごとに記録した。

（注1）『古事記』や『日本書紀』

8世紀前半に奈良時代の朝廷がこの国の成り立ちを整理しようとしたとまとめた書物。



2 田能村直入によって描かれた櫻井家と内谷鍛冶場山内図（明治12年） 3 山を切り崩し流した「鉄穴流し」 4 鉄穴流しによる砂鉄採取 提供：奥出雲町教育委員会

1 鉄師の一つ、櫻井家住宅（国指定重要文化財）の日本庭園。右手にある落差15mの滝は鉄穴流しの技法を用いて1km上流の川から水を引く。七代藩主・松平治郷（不昧）公が「岩浪（がんろう）の滝」と命名した

師（注4）のみにたたらを認めます。炭をつくる山林（注5）の独占使用も許すなど手厚く保護し、藩の主要産業に育てました。

その結果、斐伊川流域にはさまざまのものが生まれました。その一つが棚田です。鉄穴流しには水路が必要ですが、水源がすぐそばにあることは少なく、離れた場所から水を引かなくてはなりません。「つまり鉄師は水利技術者でもあるわけです」（尾方さん）。この地の人々は、砂鉄を掘り尽くした山の跡と鉄穴流しの水路を再利用し、棚田をつくったのです。また、たたらはたんに鉄をつくるだけでなく「地域の産業システム」として機能していました。奥出雲たたらと刀剣館の資料によると、1875年（明治8）の糸原家には1200人余りが従事し、家族を加えると5000〜6000人もの人々がたたら操業に関係しています。従業員だけでなく、木炭の製造、砂鉄の採取、鉄の運搬などで村人も収入を得ていたのです。

「たたらとは、ある特殊な人間が山のなかで黙々と鉄をつくっていたのではなく、村人もかかわった『農鋳一体』の地域経営だったのです」という尾方さんの言葉は頷けます。

斐伊川の舟運が支えた奥出雲のたたら

鉄師たちはどうしてこのようなしくみをつくったのでしょうか。

「有力鉄師は現代の『総合商社』と考えてください。彼らは鉄をつくるだけでなく、地主なので田畑もあるし、小作人もいました。さまざまなお仕事をこなして、たたらを支える人たちの生活を守ることこそ、経営の維持につながるのです」

そう話すのは、鳥根県立古代出雲歴史博物館交流・普及課長の角田徳幸さん。たたら研究を続ける角田さんは、奥出雲で生産された鉄が全国に広まったのは、斐伊川の舟運があったからだと言いました。

「現代も同じですが、生産と流通は一体。鉄を量産しても運べなければ他の産地にとってかわられます。鎌倉時代までは日本各地で鉄はつくられていたが、淘汰されました。しかしここは違います。斐伊川上流でつくられた鉄が馬と川船を用いて下流域まで運ばれたという室町時代の記録も残っています」

角田さんは、鉄は斐伊川から日本海沿岸部の港に送られ、さらに廻船によって大坂や北陸など広域に流通



（注6）杵築と宇籠

杵築は出雲大社の門前町で、大社湾に面していた。宇籠は古来栄えていた港町で、大社湾の北にあった。

（注5）炭をつくる山林

鉄山（てつざん）とも呼ぶ。鉄師が経営するために必要な鉄山は1年間に110ha。木が成長する期間を30年と見なすと、一巡りするためには3300haもの面積が必要だった。

鉄穴流し跡に開かれた福寄（ふくより）集落。棚田を含むこの美しい風景が山を崩してつくられたものとは、にわかには信じがたい



上：かつての川筋を活かしてつくられた斐伊川放水路 左：宍道湖からおよそ6.5km上流にある西代橋付近の「网状(うろこ状)砂州」 提供：国土交通省 中国地方整備局 出雲河川事務所 右：斐伊川の中・下流部を案内してくれた国土交通省 中国地方整備局の山本浩之さん



5 たたら製鉄が「地域の産業システム」だったことをわかりやすく説明する奥出雲たたらと刀剣館の尾方豊さん
6 たたら製鉄を長年研究している島根県立古代出雲歴史博物館交流・普及課長の角田徳幸さん



水害が起きます。国と県は「斐伊川・神戸川治水計画3点セット」(注8)と呼ばれる事業を実施。その一環である斐伊川放水路は2013年(平成25)6月の竣工です。この放水路は、洪水時に斐伊川の西側を流れる神戸川へ分流させるためのもの。

斐伊川は、大雨で氾濫して東へ流路が変わる1635年(寛永12)まで大社湾に注いでいました。角田さんが室町時代以降に鉄が運び出されてきたと考える二つの港・杵築と宇龍(注6)も旧河口の近くにありました。斐伊川の分派点(注7)から下流を国土交通省 中国地方整備局 出雲河川事務所 計画課長の山本浩之さんに案内していただきました。

放水路によって再び大社湾へ

「奥出雲の鉄は瀬戸内海ではなく、日本海に川船や馬で運び、北前船に載せていた。つまり、斐伊川がなければ奥出雲の鉄も十分流通できなかったと言えるのです」

「奥出雲の鉄は瀬戸内海ではなく、日本海に川船や馬で運び、北前船に載せていた。つまり、斐伊川がなければ奥出雲の鉄も十分流通できなかったと言えるのです」

「放水路によって斐伊川は再び大社湾へ流れることになりました」と山本さん。これまでに4回分流して、洪水を未然に防いでいます。最後に山本さんが案内してくれたのは、宍道湖からおよそ6・5kmの地点に架かる西代橋。橋から斐伊川を眺めると水量は少なく、砂ばかりが目立ちます。

「『网状(うろこ状)砂州』と呼ばれる砂州です。これはまさに鉄穴流しという人の営みから生まれたものなのです」と山本さんは言いました。出雲の人にとって斐伊川はどんな川なのでしょう。お会いしたすべての方にお聞きしましたが、代表として藤岡さんの言葉をご紹介します。「『出雲国風土記』には『五つの郡の民、川によりて住めり』と記されています。つまり、人々は斐伊川のおかげで暮らしていると、高らかに謳われているのですよ」(藤岡さん)

「湖沼が河口になっている川は珍しいですが、下流域が二つの湖沼で連続している斐伊川はもっと珍しいです」と宍道湖と中海に興味津々の坂本くん。汽水湖の調査研究を行なうNPO法人自然と人間環境研究機構の理事長、石飛裕さんを訪ねました。

「湖沼が河口になっている川は珍しいですが、下流域が二つの湖沼で連続している斐伊川はもっと珍しいです」と宍道湖と中海に興味津々の坂本くん。汽水湖の調査研究を行なうNPO法人自然と人間環境研究機構の理事長、石飛裕さんを訪ねました。

「神秘的な神話の数々、そして知恵と工夫による地域の産業システム、鉄の流通を支えた舟運——。斐伊川は、歴史と産業と人々の暮らしが非常に密接な川でした。」

「湖沼が河口になっている川は珍しいですが、下流域が二つの湖沼で連続している斐伊川はもっと珍しいです」と宍道湖と中海に興味津々の坂本くん。汽水湖の調査研究を行なうNPO法人自然と人間環境研究機構の理事長、石飛裕さんを訪ねました。

「湖沼が河口になっている川は珍しいですが、下流域が二つの湖沼で連続している斐伊川はもっと珍しいです」と宍道湖と中海に興味津々の坂本くん。汽水湖の調査研究を行なうNPO法人自然と人間環境研究機構の理事長、石飛裕さんを訪ねました。

「シラム2」 微妙なバランスで成り立つ汽水湖

【注7】分派点

主要流路(本川、本流)から流路(派川、分流)が分岐する地のこと。ここでは斐伊川から斐伊川放水路が分岐する地点を指す。

【注8】「斐伊川・神戸川治水計画3点セット」

①上流=尾原ダムと志津見ダムの建設、②中流=斐伊川放水路の建設と斐伊川本川の改修、③下流=大橋川の改修と宍道湖・中海の湖岸堤の整備(継続中)

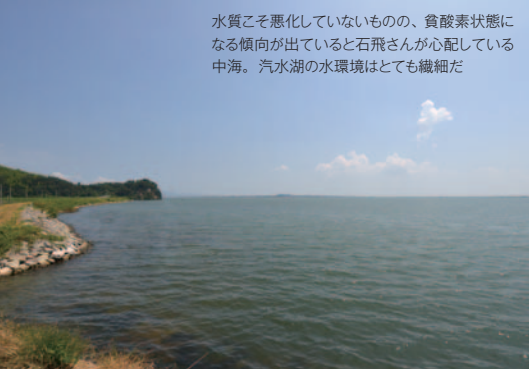


中海と宍道湖の環境について話す石飛裕さん

「水質、水の循環、塩分濃度など、いくつもの要因が絡みあい、微妙なバランスで成り立っているんですね」と感心する坂本くんでした。

「スズキ、モロゲエビ、ウナギ、アマサギ(ワカサギ)、シラウオ、コイ、シジミです。『すもうあしこし』と覚えるんです」と笑う石飛さん。こ

「水質こそ悪化していないものの、貧酸素状態になる傾向が出ていると石飛さんが心配している中海。汽水湖の水環境はとても繊細だ



第25回里川文化塾

忍城の水利用 参加者募集中!

ミツカン水の文化センターでは、「使いながら守る水循環」を学ぶための「里川文化塾」を年に数回開いております。

第25回目となる今回は、小説および映画『のぼうの城』で一躍有名になった「忍城」を舞台に開催します。

忍城は、沼地のなかの地形を巧みに活かして建設され、室町時代から明治初年にかけて存在した城です。水郷のなかに点在する様はまさに要害。「難攻不落の城」として名高かったと伝えられています。

山城に代表されるように、そもそも城は見通しの利く高台に設けられることが多かったため、飲み水の確保に苦勞し、井戸は必須でした。そうした城と水の関連も視野に入れつつ、湿地帯につくられた「忍城」の水利用について行田市郷土博物館 学芸員の澤村怜薫さんに解説していただきます。

豊田秀吉の命を受けた石田三成が忍城に仕掛けたと伝わる「水攻め」の跡地（「石田堤」と呼ばれる堤防）も巡り、城にかかわる水利用について学びます。

日時：2016年11月27日（日）9:30～17:00 ごろ
（小雨決行。荒天時の順延日＝12月11日（日））

フィールド：埼玉県行田市

座学会場：行田市郷土博物館（埼玉県行田市本丸17-23）

集合・解散場所：[集合] 9:30 JR 東日本・秩父鉄道「熊谷駅」北口
→貸切バスで行田市郷土博物館へ移動

[解散] 16:45 ごろ JR 東日本・秩父鉄道「熊谷駅」北口
（交通状況により遅延の可能性あり）

当日の予定：午前中＝講師による座学。館内見学

午後＝さきたま古墳公園内の「丸墓山古墳」

および「石田堤」の史跡を視察

※上記は予定です。変更する場合もございますので、
詳しくはホームページをご覧ください

講師：澤村怜薫 さん（行田市郷土博物館 学芸員）

2016年11月27日（日）開催決定！
（埼玉県行田市周辺）

※小雨決行。荒天時の順延日は12月11日（日）



忍城の本丸跡に建てられた三階櫓（模擬）と堀



「水攻め」のため石田三成が陣を張ったといわれる「丸墓山（まるはかやま）古墳」



石田堤の痕跡。予想以上の雨量でこの堤が切れて「水攻め」は失敗したとされる

【里川文化塾 開催報告】

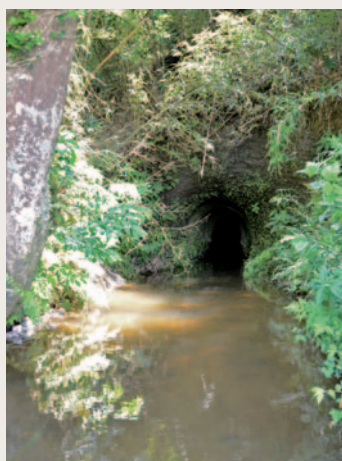
第24回里川文化塾

「丘陵地を水田にした熱意の結晶『二五穴』」

本誌53号でお知らせしました第24回里川文化塾「丘陵地を水田にした熱意の結晶『二五穴』——100年経っても現役のトンネル用水路を巡る」は、予定どおり2016年7月31日に開催しました。

「里川文化塾」は、参加なさった方々以外にも内容を知っていただくために、終了後に「開催レポート」を公開しております。ぜひご覧ください。

山を刳（く）り抜いた「二五穴」と用水路



里川文化塾「開催レポート」

<http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/houkoku/>

【水の風土記 最新インタビュー】

海のない地域に残る「海魚の食文化」～「魚尻線」がもたらしたもの～

魅力あふれる独自の「水の文化」を培っている「人」や「事・場」を訪ね、研究や活動を紹介する「水の風土記」。人にフォーカスする〈水の文化 人ネットワーク〉で「魚尻線」を取り上げました。

海のない山梨県で、今もマグロの刺身が多く食べられている理由が魚尻線です。山梨県立博物館 学芸員の植月学さんに山梨県における海魚の食文化と魚尻線についてお聞きしました。



植月学（うえつきまなぶ）さん
山梨県立博物館
学芸員

（2016年8月公開）

水の風土記

<http://www.mizu.gr.jp/fudoki/>

水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

■里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。今後の企画についても、順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

皆さまの感想を お待ちしております！

『水の文化』54号について、アンケートにご協力ください。
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。

<http://www.mizu.gr.jp/form54.html>



※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて
下記へご返信いただく形でも結構です。

FAX : 03-6685-7596

メールアドレス : tokyo-office@mizu.gr.jp

編集後記

昆布ロード、古式捕鯨、焼物の縁、追分、調査し取材するまで知らないことばかりだった。歴史の勉強不足も痛感した。これからも海や川を見る機会は数多くあるだろう、その時には先人達の積み重ねてきた営みや想いを想像してみたい。さて、今号は皆さんに先人達の知恵や想いは伝わっただろうか？（後）

実はミツカン創業の酢も、江戸時代に弁才船で尾張から江戸へ運ばれた。そして、江戸で握り寿司の食文化が開花するのを下支えた。色んな文化の陰に和船あり。当時の船は木材にリサイクルされたりして残っていないが、運んだ文化の痕跡は確かに残っていた。（松）

昨年の里川文化塾で「昔は大量の荷を運ぶには船が最適の方法だった」と伺った。縦に長い島国で山がちな地形が多いこの国で、確かに舟運は不可欠だったのだと今回改めて感じた。和船は人や荷と同時に、文化やロマンも運んでいた。そう思うとワクワクする。（原）

想像もつかない場所同士のつながりがあったことを知り、形あるものだけが、船で運ばれたのではなかったことを知った。船に乗って人が往来し、交わりが何かを生んだ。今も昔も交わりは何かを生む。当たり前のことかもしれないが、再確認できた号だった。（吉）

現在の輸送はスピード重視。目的のモノだけを求めれば実に便利な世の中だ。今回の取材で思い知ったのは、圧倒的な時間感覚の違い。時間をかけて、様々な場所を経由して時には変容し、目的のモノとともに運ばれた文化は魅力的だった。そして私は本誌人稱に追われています……（力）

海の道の雄大さ、自由さを実感した号でした。和歌山の太地町は陸路だと少々不便でも、海を道と考えれば伊勢湾や瀬戸内海、四国も含めた大きな交流圏の要衝です。ときに大荒れとなる海を、危険を承知で行き来した人々のことを考えると、今の通念にとらわれず、もっと自由に生きていいのかなとも思いました。（前）

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第54号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中塾ビル 4F

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 事務局

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-11-3 中銀 NM・5F

Tel. 03 (6264) 9471 Fax. 03 (6685) 7596

発行日

2016年（平成28）10月

企画協力（氏名50音順）

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学教授

鳥越皓之 大手前大学学長

中庭光彦 多摩大学教授

制作

後藤喜晃

松本裕佳

小林夕夏

原田朱野

吉田奈保子

編集製作

前川太一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

執筆

佐々木 聖 (pp.5-8, pp.22-26)

手塚ひとみ (pp.16-21)

開 洋美 (pp.10-15, pp.38-39)

前川太一郎 (pp.27-33, pp.45-49)

撮影

大平正美 (pp.16-21)

川本聖哉 (pp.9-15, pp.22-26, pp.38-39)

鈴木拓也 (pp.27-33)

中野公力 (p.6, p.17, pp.45-49)

藤牧徹也 (pp.10-14, pp.40-44)

DTP

蔵田 豊 (p.34)

印刷

中塾総合印刷株式会社



ミツカン水の文化センター

表紙：河口から3km上流のご神体「河内様(こわつたま)」を目指して紀州の古座(こざ)川を遡る「御舟(みふね)」。江戸時代に古式捕鯨で栄えた古座鯨方(くらかた)の鯨舟に装飾を施し、軍舟に見立てたもの。日没後は、かの岡本太郎が「これほど華やかでなまめかしいものだとは想像していなかった」と評した神秘的な行事「夜籠り神事」も行なわれる(撮影：鈴木拓也)

裏表紙上：尺八の音色にのせて歌われる江差追分。哀愁を帯びた調べが聴く者を惹きつける。唄は山本康子さん、尺八は山本滋さん。江差の割烹「味処やまもと」を夫婦で切り盛りしながら、江差追分も披露する(撮影：川本聖哉)

裏表紙下：かつて西海で行なわれた古式捕鯨「網取法」を再現したジオラマ(平戸市生月町博物館 島の館)。山見の知らせを受けて勢子舟が音を立てながら網に鯨を追い込み、網を被り動きの鈍った鯨を鉆で撃って仕留める(撮影：鈴木拓也)

